

6 生徒の英語コミュニケーション能力の向上と評価について

(1) WSA+SA テストに基づく論証能力(議論するための発信能力)の評価

(1) 論証能力の定義と評価

論証能力の定義

3年間にわたる本校のSELHi研究開発では、「論証能力(議論するための発信能力)」は、「身近だが賛否両論のあるテーマ」に対して自分の意見を論理的に伝えることのできる力と定義した。

またその能力は「流暢さ」・「正確さ(綴り・発音・文法)」・「(内容の)適切さ」の3つの指標によって表現することとした。そして、この3つの指標をライティングとスピーキングにおいて測定することによって、「書く」と「話す」ことが相乗効果的に向上するプロセスを追跡し、指導法改善の根拠を導き出すことを目的としてきた。

この「論証能力」を測定するために研究開発の第一年次の後半と第二年次には、本校独自開発のWSAテスト(Writing and Speaking test for Argumentation)を行い、ライティング能力とライティングによってアイデアを生成した後の半即興性のスピーキング能力(Speaking)を測定した。

さらに今年度、研究開発の第三年次は、新規に、アイデアを生成することなく話す、純即興性のスピーキング能力(Speaking)を導入した。

WSA テストおよび WSA+SA テストの概要と実施結果、およびそれに先行する指導との対応は、もう既に述べてあるが、ここでは、3年間の研究開発を通じて明らかとなった主要な点に言及する。

また、技能ごと・指標ごとのパフォーマンスの経時変化の詳細については、6 - (1) - {2} ~ {4}に呈示する。

Speaking α



Speaking β

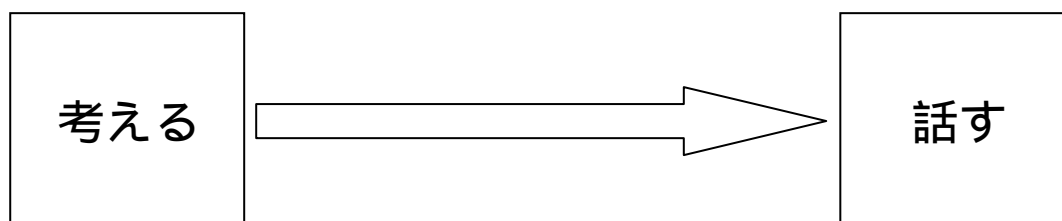


図6 - 1 - 1 - 1 スピーキング と のプロセス・イメージ

「英語による論証能力(議論する力)」の WSA テストおよび WSA+SA テストによる評価

WSA テストおよび WSA+SA テストによる論証能力の測定は、平成 16 年 12 月～平成 18 年 12 月まで行った。測定時期は 4 月、7 月、12 月(2 月)。対象は国際コースすべて(約 120 名)であった。以下に各指標の平均値に基づいて、特徴のある結果と推定される要因に言及する。

スピーキングの「流暢さ」は、ほぼ確実に不可逆的な向上をする

SUP に基づく指導に基づく限り、発信能力の「流暢さ」は、半即興および純即興スピーキングの両方において、ほぼすべての学年で有意な向上を示した(平成 17 年度の 2 年生の半即興、平成 18 年度の 2 年生の純即興を除く)。昨年度、今年度とも 3 年生は、流暢さの平均値では、研究開発における目標値である 75WPM を達成した。

< 推定要因 >

- ・ WSA+SA テストによる論証能力(とくに SPEAKING)の継続的な評価が、生徒の学習スタイルを変容した
- ・ トレーニング型の学習活動の導入によって、言語・知識を音声化するプロセスが効率的になった
- ・ 数値目標をシラバスやトレーニングに導入し、日頃から自己評価を行わせることで生徒と教師が互いに目的を持って活動に臨むことができた

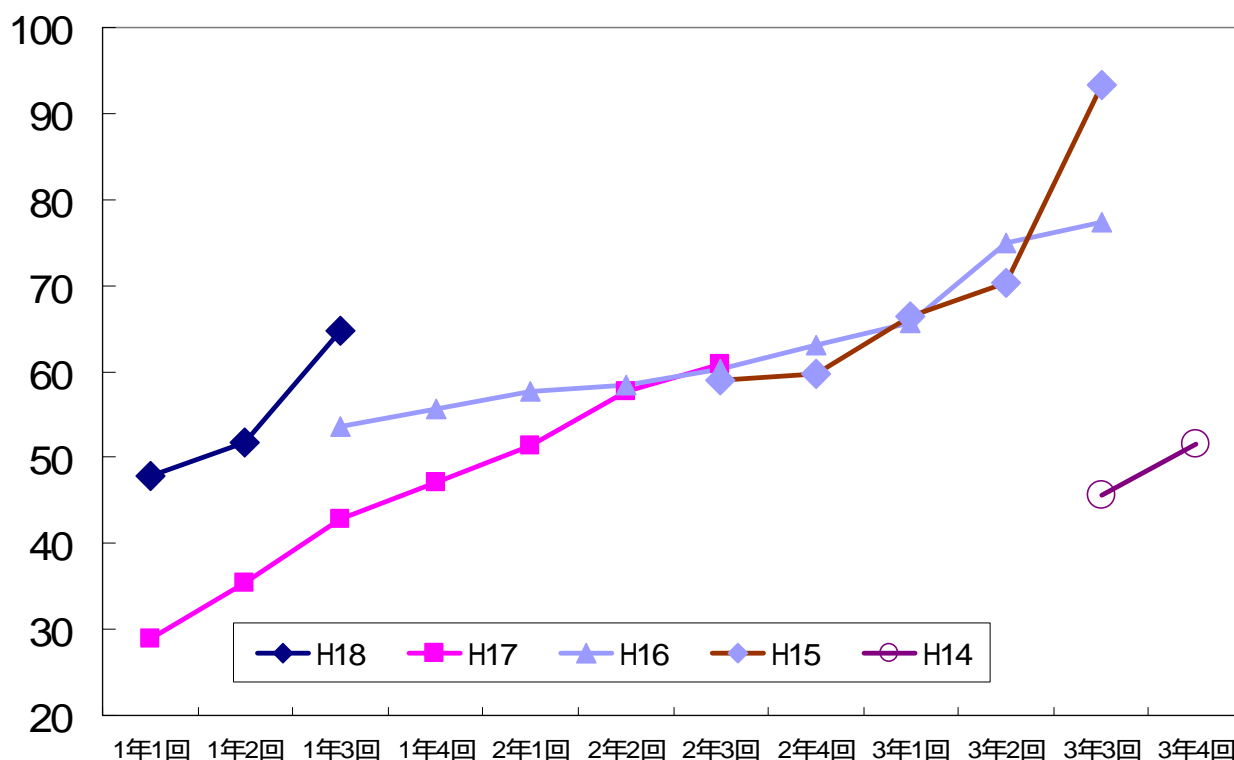


図6 - 1 - 1 - 2 スピーキング の「流暢さ(平均値)」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WPM)

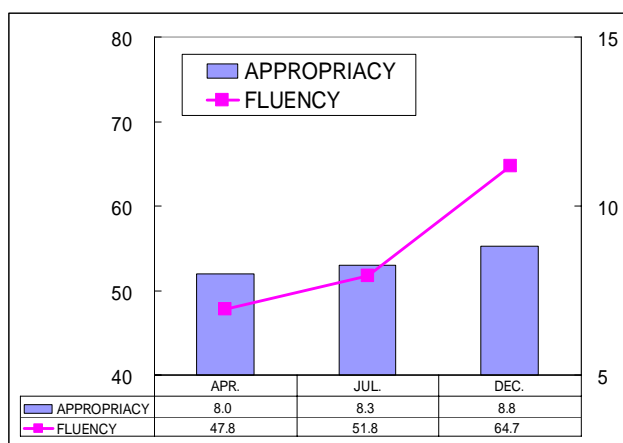
「流暢さ」(量)が向上しても、「適切さ」「正確さ」(質)は必ずしも向上しない

「量」としての「流暢さ(WPM)」は不可逆的に向上することが示された。しかし、「量」が向上しても、「適切さ(論理性)」や「正確さ(発音・綴り・文法)」などの「質」は必ずしも向上する一方ではないことが示されている。これは現在の SUP による指導の限界と課題である。

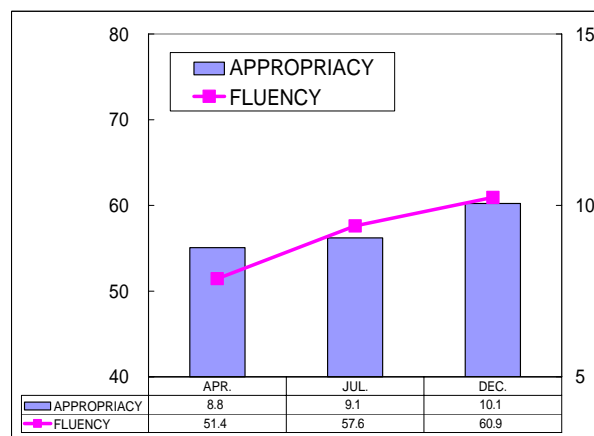
今後は「質」をさらに高めるような指導法の改善が必要とも考えられるが、しかし、生徒個々の学習のための能力資源にも限りがあり、新しい SUP の作成にあたっては系統的に「量」と「質」のバランスをとりながら指導を行うことを考慮する必要があることも予期される。

< 推定要因 >

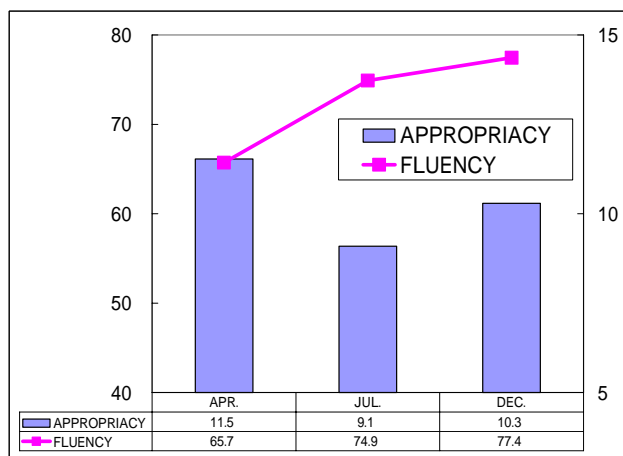
- ・ 「質と量のトレードオフ関係」は避けられない。すなわち「量」の向上を重視すれば「質」が向上しなかった、あるいは「質」の向上を重視すれば「量」が向上しなかったということ
- ・ 「質」の指標のうち、とくに「適切さ(論理性)」は主観的な指標であり、実際には能力が向上していても、テストの回を追うごとに採点者の要求水準も高くなる。従って、評価が厳しくなっていく、見かけ上、向上が見られなかった



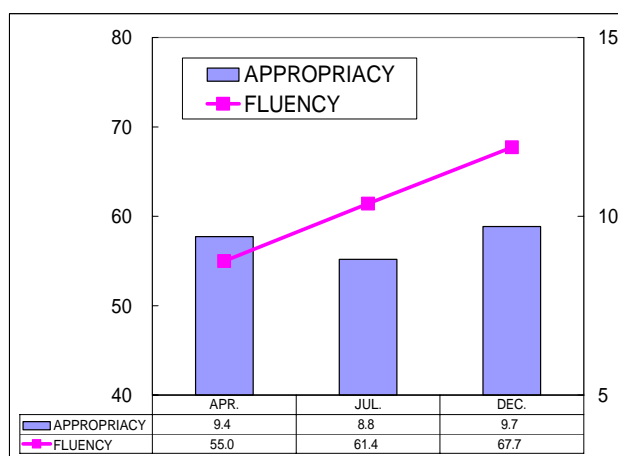
1 年生(H18入学)



2 年生(H17入学)



3 年生(H16入学)



全体

図6 - 1 - 1 - 3 スピーキングの「流暢さ(WPM)」に基づく即興性の維持率

「スピーキングの即興性が本当に身につくのか」はこれからの課題

「議論するためのスピーキング能力」は、研究開発の第一年次と第二年次においては、「ライティングによってアイデアを生成した後の半即興性のスピーキング能力」を中心に検討してきた。これは「半即興」であっても、「メモなどを見ずに話すこと」や、「賛否両論のある話題という、たとえ日本語であっても論理的に話すことは難しいと思われるような話題であること」、さらに「まず書くことによって自分の考えをまとめてから話すといのは授業においても日常生活においても自然な流れであること」から、十分に即興的な発話と認め得ると判断したためである。

しかし、ディベートやディスカッションの中で求められる発話には、決して下準備を前提としない場面も多く、このことを意識した指導と評価も必要と考え、研究開発の第三年次にはこのような場面に対応した「純即興」の評価を加えた WSA+SA テストを行った。

「流暢さ」の平均値を基にした即興性の維持率(=純即興/半即興)は、全体で 90%~83%であり、「質」を重視する 2 年生で低くなるが、総じて著しく不適な部分はない。

< 推定要因 >

- ・ 普段の授業ではイベント型、トレーニング型ともに「考えて(メモなどを書いてみて)、話す」ことが普通である
- ・ 授業中、オール・イングリッシュの活動の中であっても、フォーマルな場でいきなり意見を求められることは比較的少ない

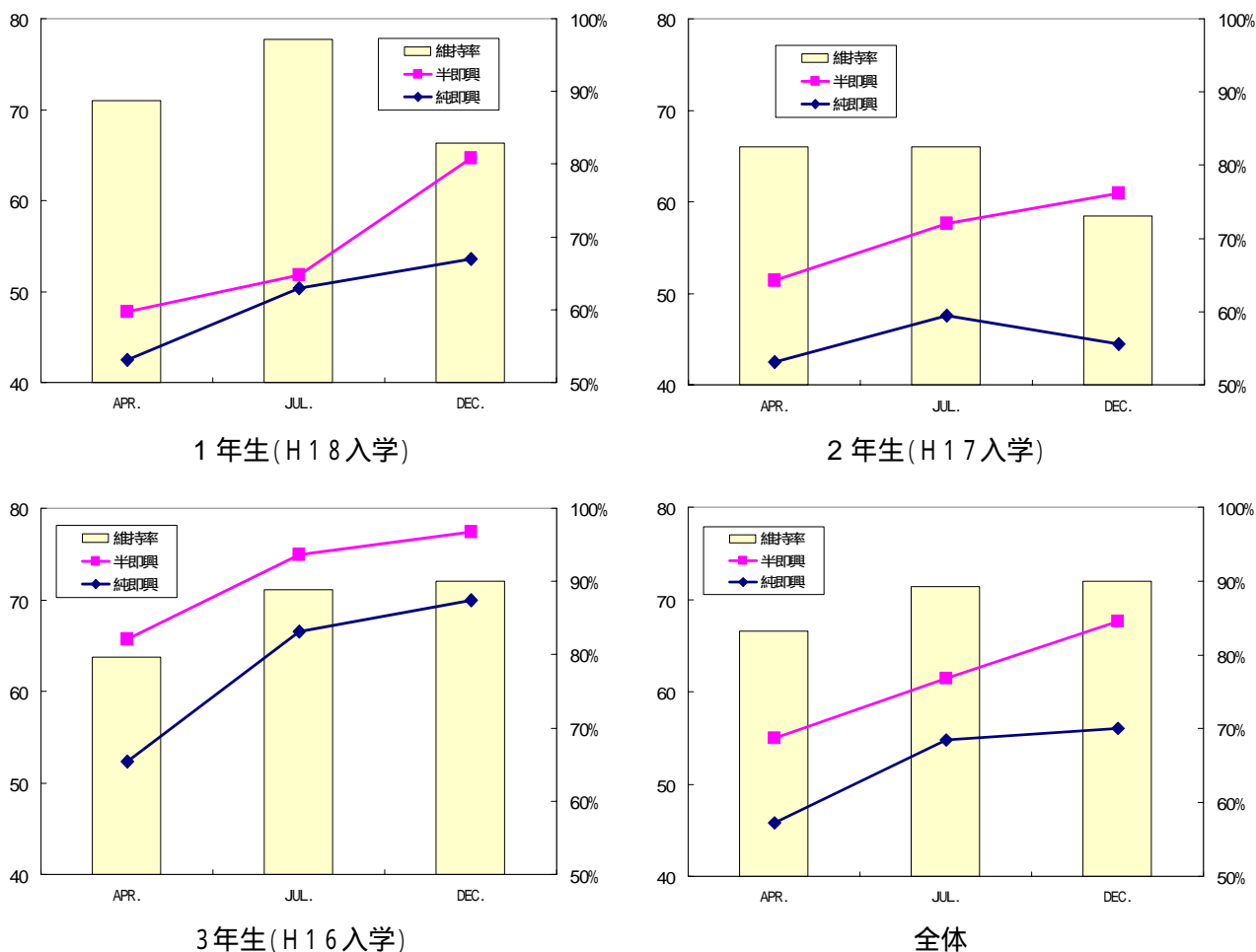


図6 - 1 - 1 - 4 スピーキングの「流暢さ(WPM)」に基づく即興性の維持率

(2) ライティング能力におけるパフォーマンスの変化

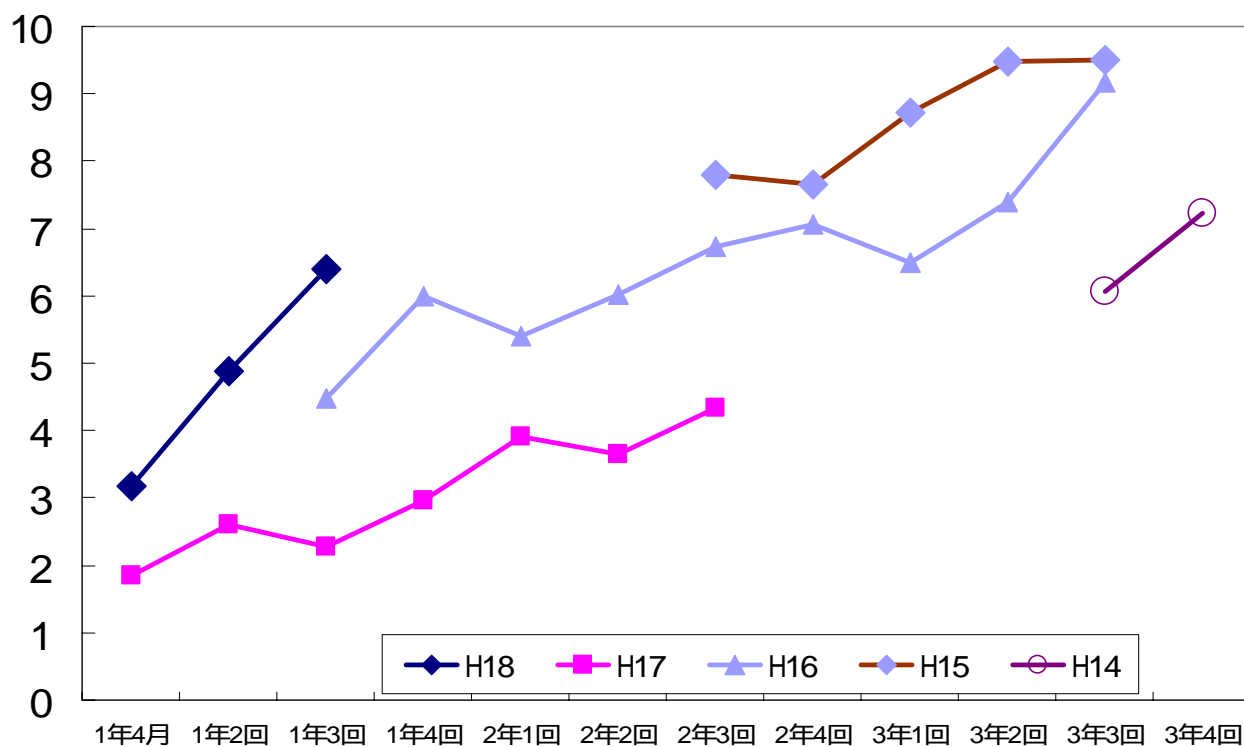


図6 - 1 - 2 - 1 ライティングの「総合指数 = 流暢さ × 適切さ × 正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (指数)

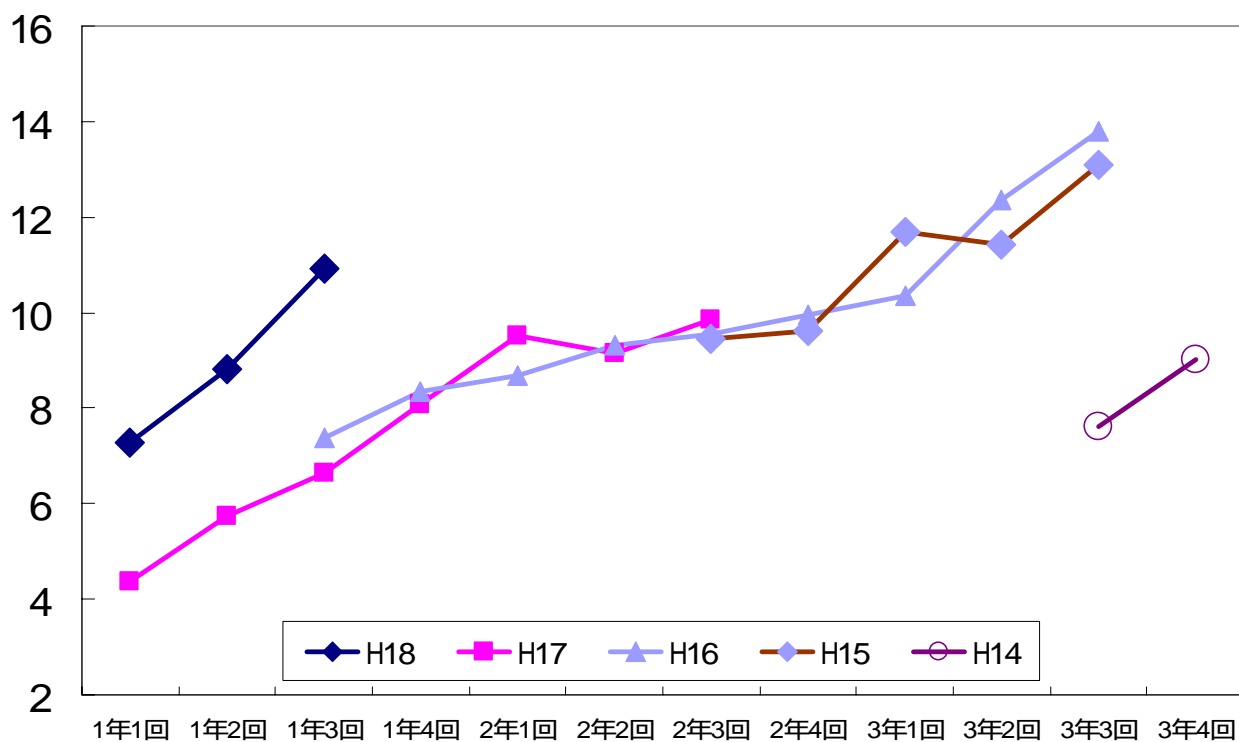


図6 - 1 - 2 - 2 ライティングの「流暢さ(平均値)」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WPM)

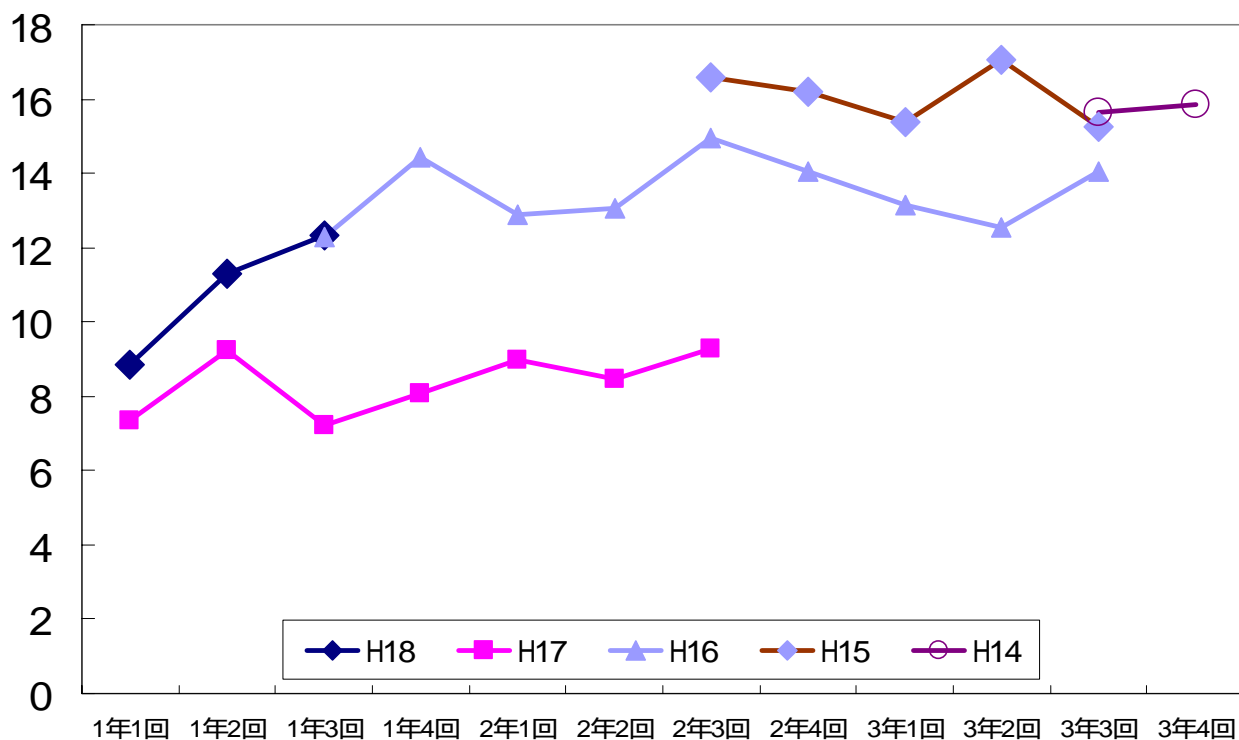


図6 - 1 - 2 - 3 ライティングの「適切さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (得点 30 点満点)

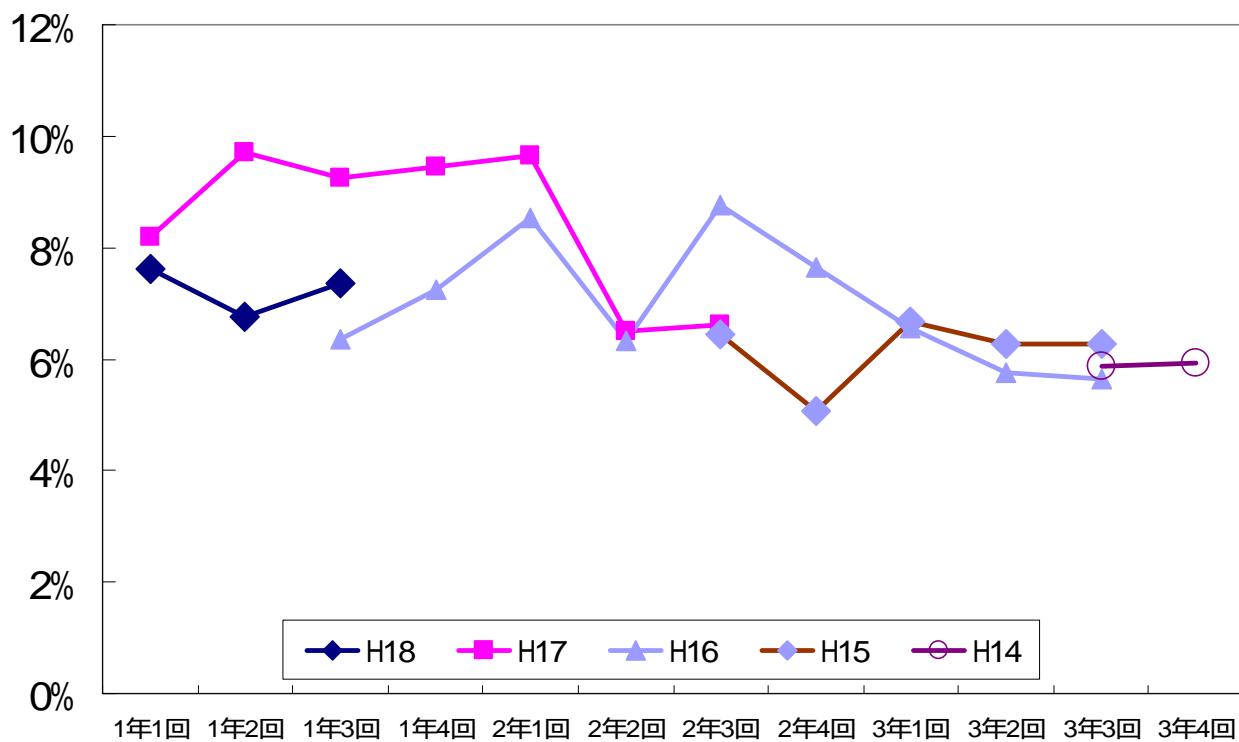


図6 - 1 - 2 - 4 ライティングの「正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (文法エラー率)

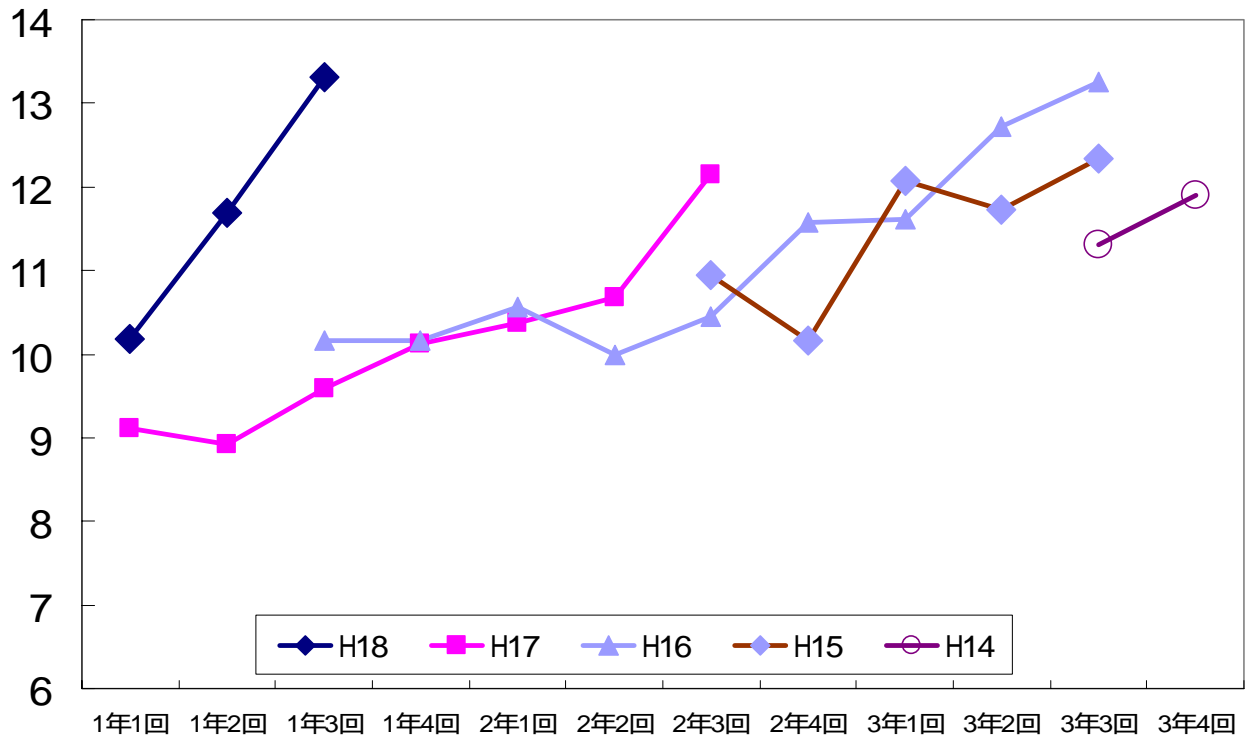


図6 - 1 - 2 - 5 ライティングの「複雑さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (1文あたりの語数)

〔3〕 半即興性のスピーキング能力におけるパフォーマンスの変化

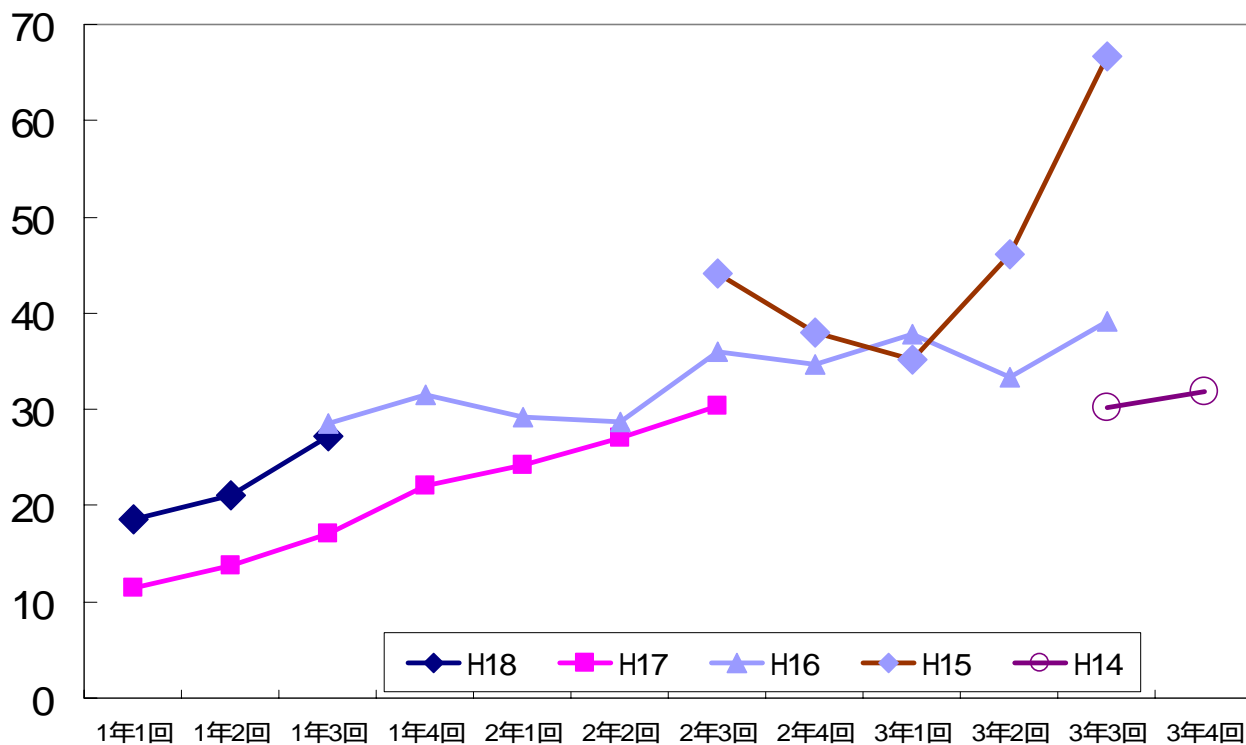


図6 - 1 - 3 - 1 スピーキング の「総合指数 = 流暢さ×適切さ×正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (指数)

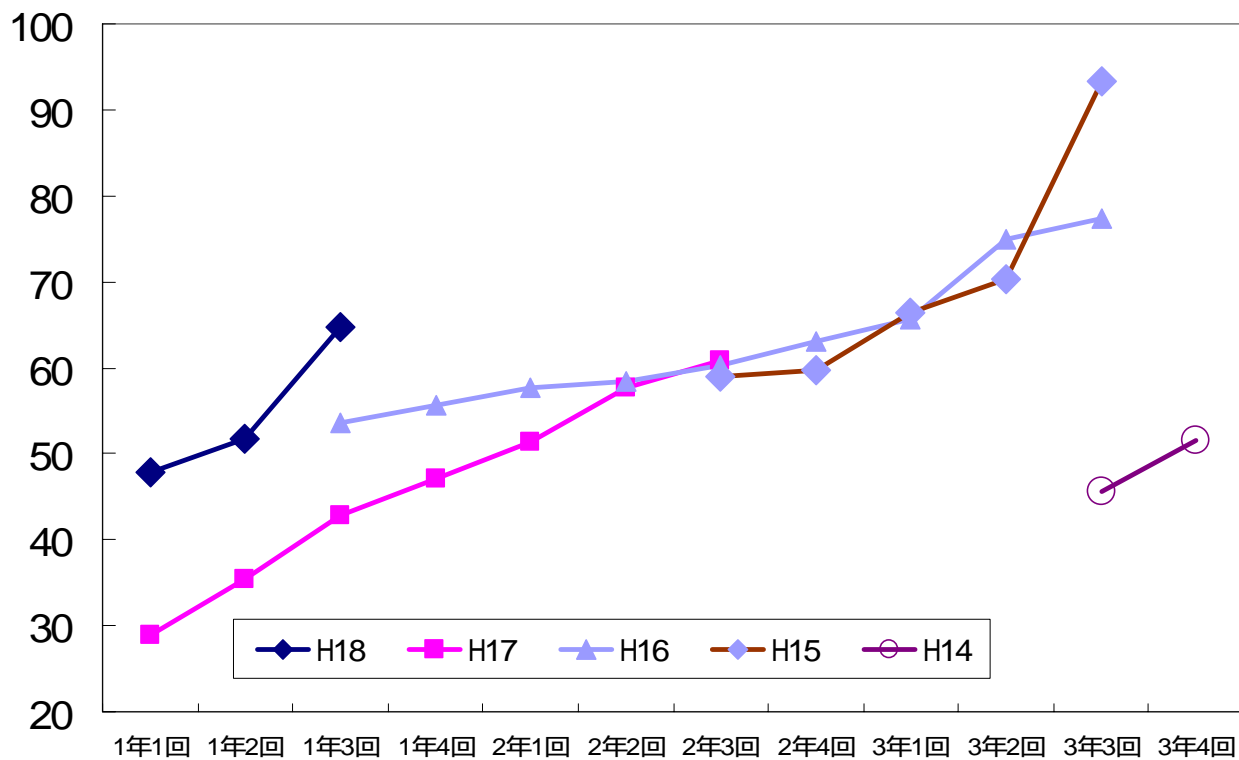


図6 - 1 - 3 - 2 スピーキング の「流暢さ(平均値)」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WPM)

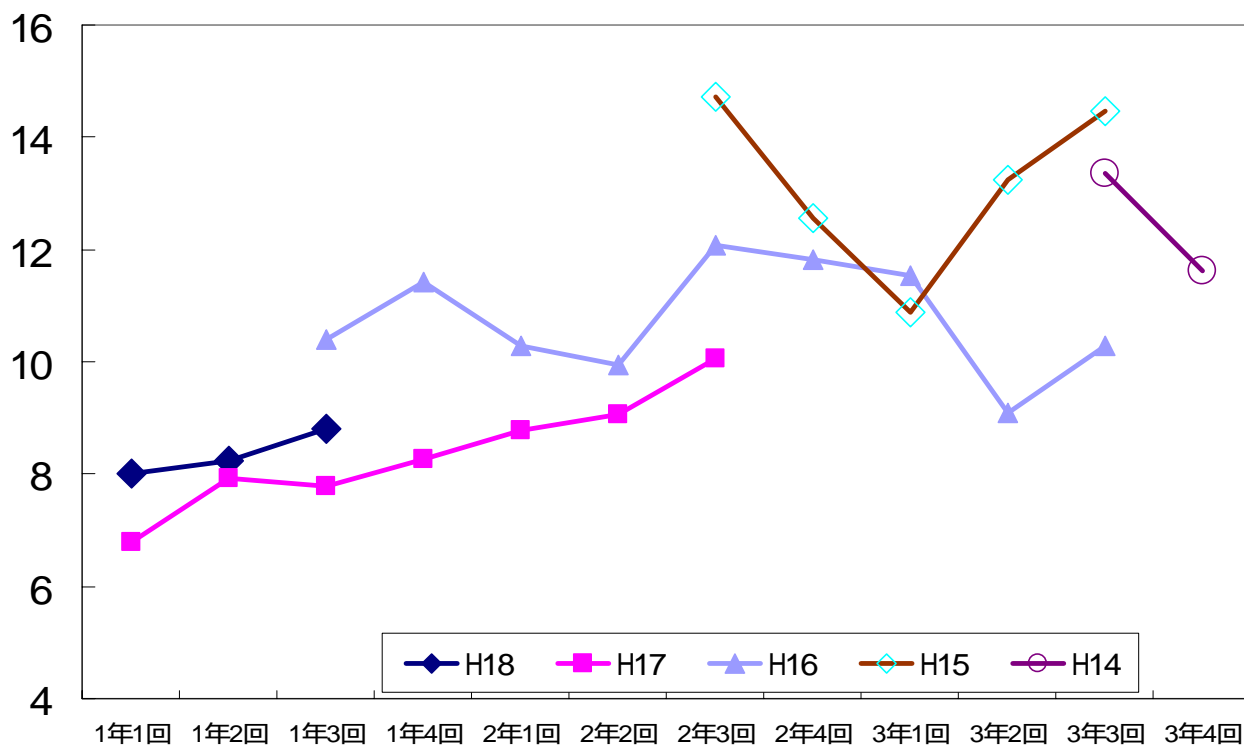


図6 - 1 - 3 - 3 スピーキング の「適切さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (得点 30 点満点)

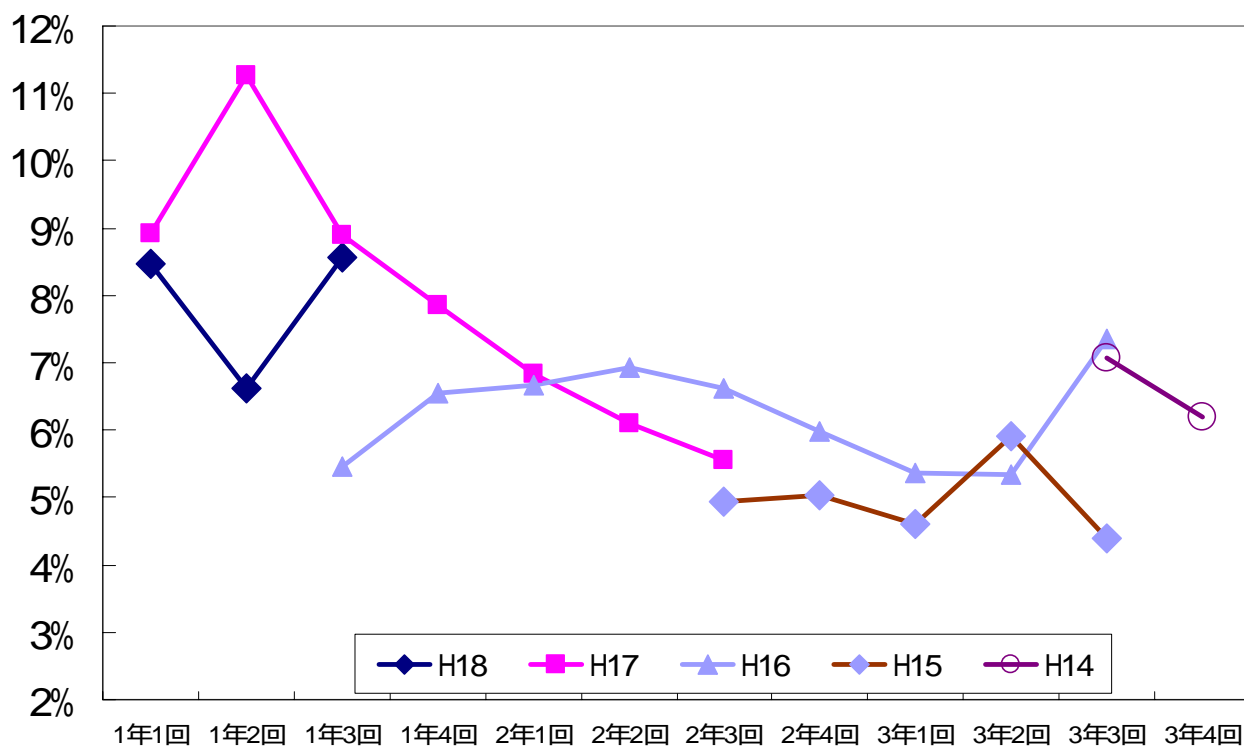


図6 - 1 - 3 - 4 スピーキング の「正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (文法エラー率)

〔4〕 純即興型のスピーキング能力におけるパフォーマンスの変化

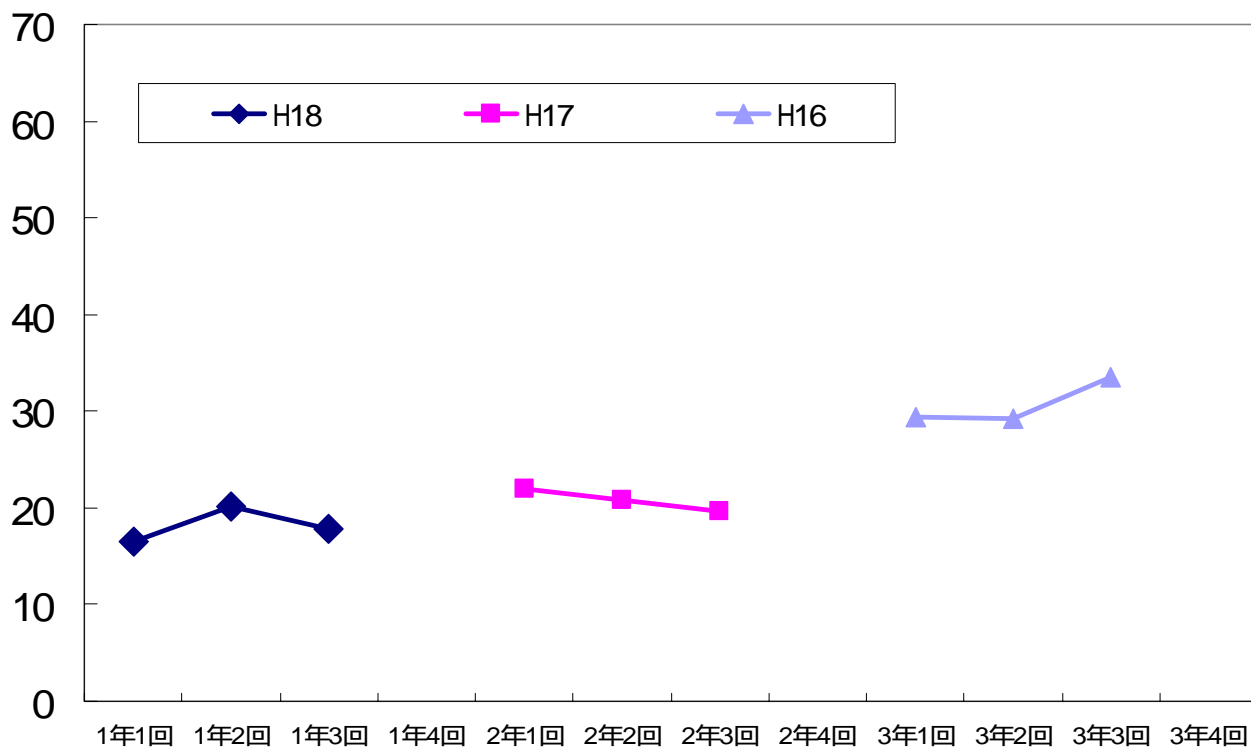


図6 - 1 - 4 - 1 スピーキング の「総合指数 = 流暢さ × 適切さ × 正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (指数)

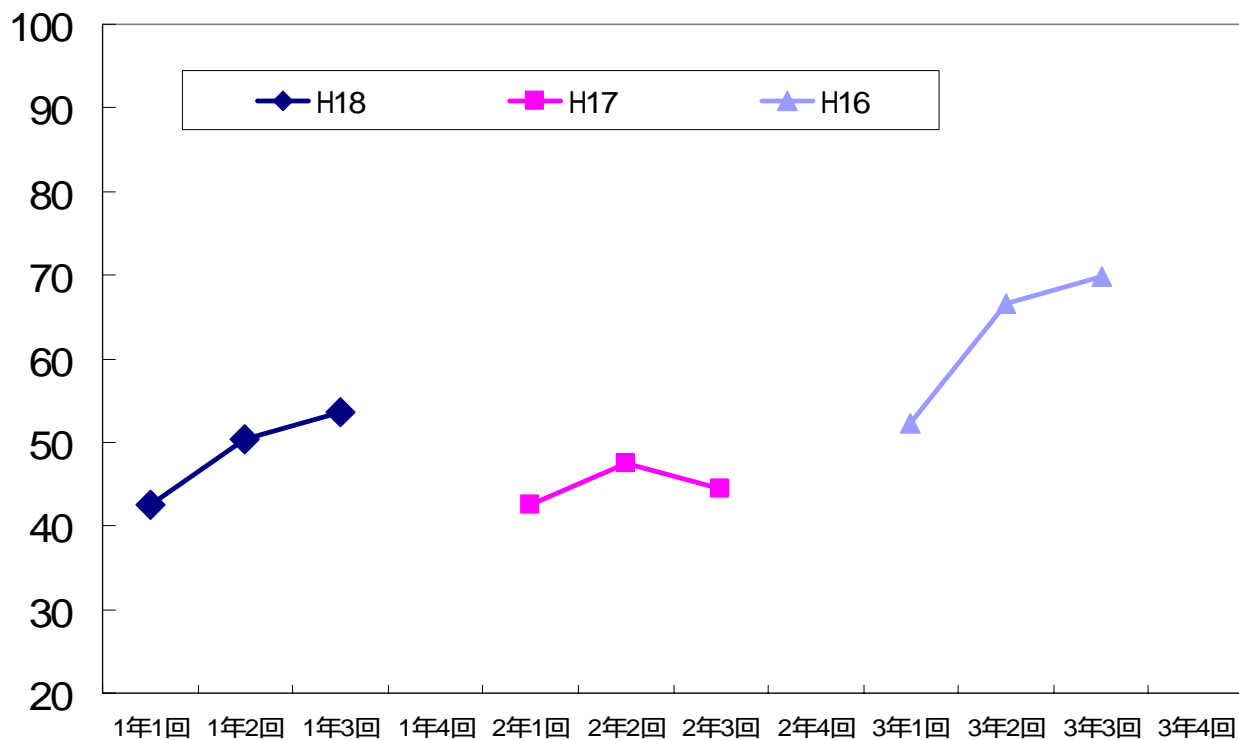


図6 - 1 - 4 - 2 スピーキング の「流暢さ(平均値)」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WPM)

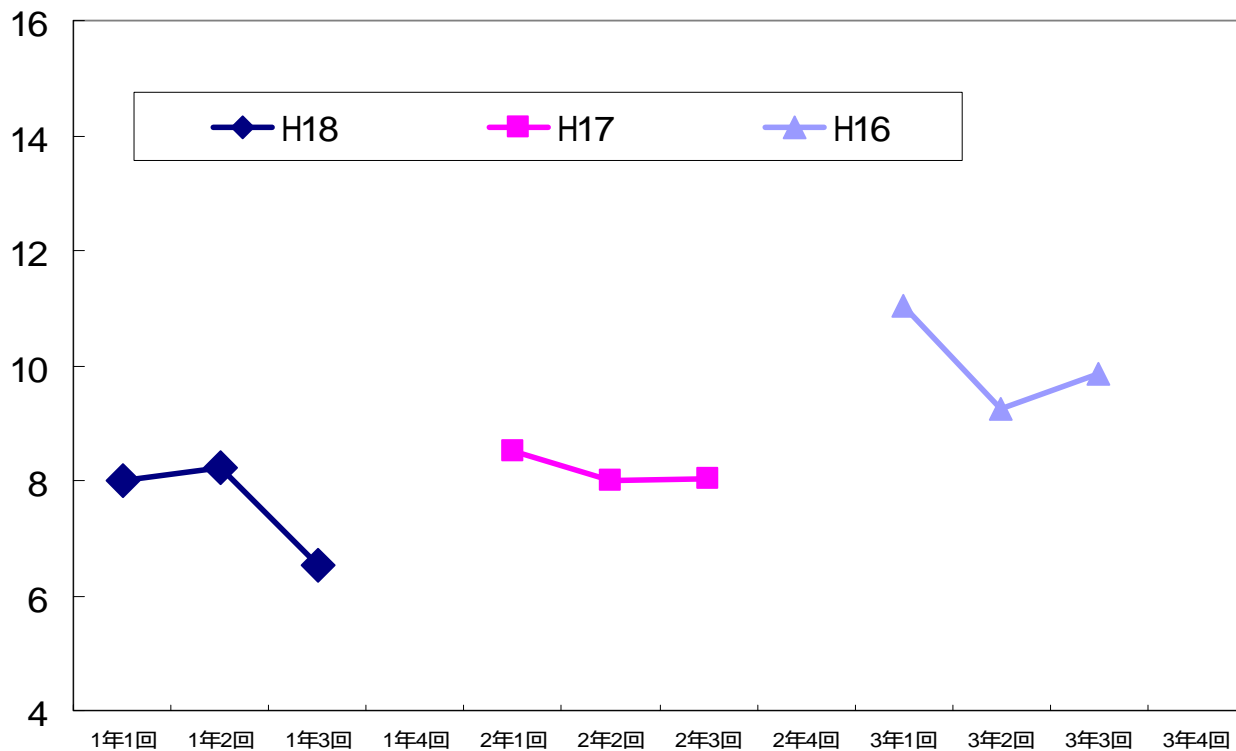


図6 - 1 - 4 - 3 スピーキング の「適切さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (得点 30 点満点)

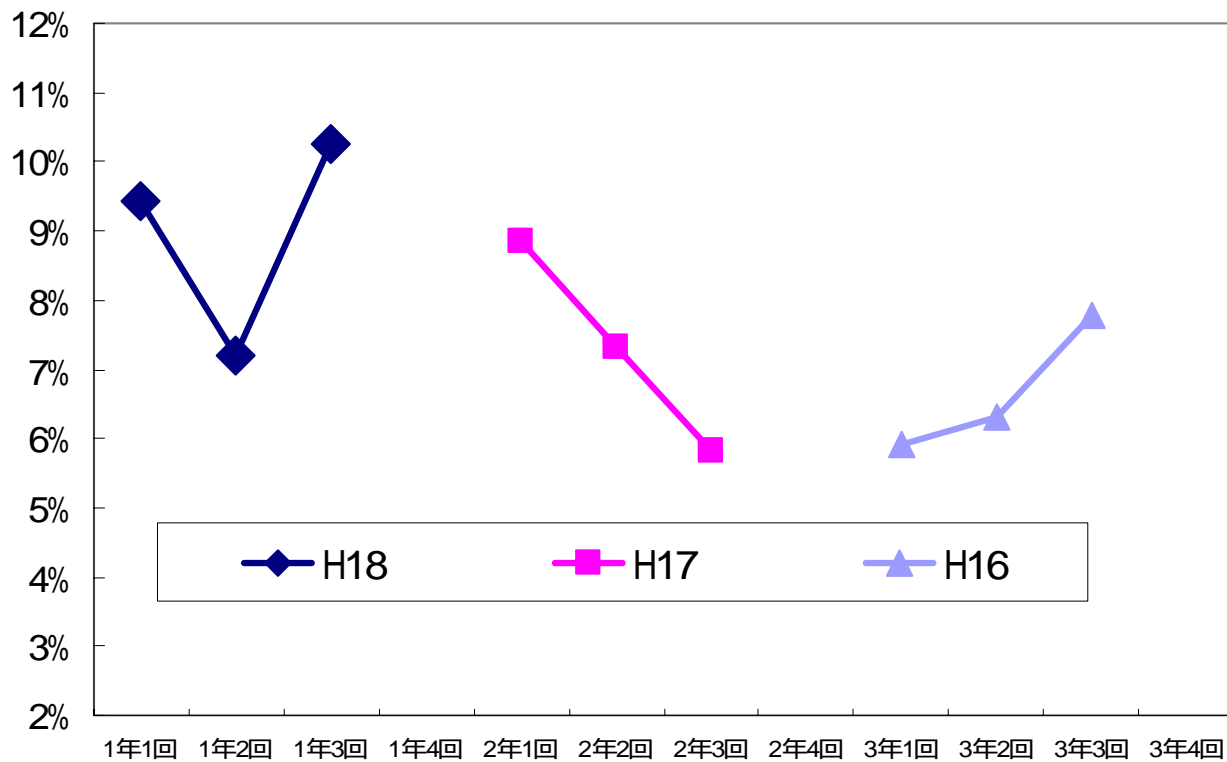


図6 - 1 - 4 - 4 スピーキング の「正確さ(平均値)」の入学年度ごとの経時変化 (文法エラー率)

(2) 外部の標準化された指標に基づく評価

(1) 実用英語技能検定 SELHi 研究開発における位置づけとこれに基づく評価

研究開発における実用英語技能検定の位置づけ

実用英語技能検定は、「話す」を含む4技能のすべてを検査することで、総合的フィードバックとしての級の認定と、技能・設問ごとのフィードバックを得ることができる。本校のSELHi研究開発では、「話す」「書く」の発信型技能の開発に特化しているため、実用英語技能検定は、二次試験の面接によって「話す」の検査を含んでいるという点で本校のSELHi研究を評価する指標として利点がある。

成果の特徴と反省

平成17年度からは、SELHiをきっかけとした教育推進事業の一環として、本校の1年生と2年生の生徒は英検を『原則全員受検』することとした。「普通科普通」を含む校内全体では、この『原則全員受検』によって、2級と準2級において、SELHi指定以前よりもさらに取得者がSELHi指定以前に比べて約4～2.5倍増加している。

しかしながら、生徒数に占める取得率から考えて、現在のところやはり「2級以上は難関」である。このことについて、SELHi研究開発の推進と普及の観点から、基盤となる英語力の伸長と同時に、「英検」の出題形式に対応した指導・取り組みが求められる。その指導・取り組みのポイントは以下の2点である。

1次試験に関して、2級(あるいは準1級)で出題される問題の設問形式と難易度レベルについて、過去問題などを通じて、日頃から授業で学習する内容との関連性を意識させ、受検に備えさせる。

2次試験に関して、現在のところ受検の直前期には「英検対策ビデオ2級・準2級(本校外国語科自主制作)」や「土曜ゼミ」などで対応している。しかし、「普通科普通」の生徒に対する発信型の英語力の普及については、国際コミュニケーションコースとは異なるカリキュラムの中で身につけさせる方を模索の必要あり。

表6-2-1-1 実用英語技能検定の準2級以上の取得者(校内)

級	SELHi 指定以前	SELHi 指定後				増加率
	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度		
準1級	0	3	1	4	***	
2級	41	103	121	144	351%	
準2級	119	216	344	468	393%	

表6-2-1-2 実用英語技能検定の準2級以上の取得者(国際コミュニケーションコース)

級	SELHi 指定以前	SELHi 指定後				増加率
	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度		
準1級	0	1	1	4	***	
2級	23	58	62	58	252%	
準2級	48	75	67	55	115%	

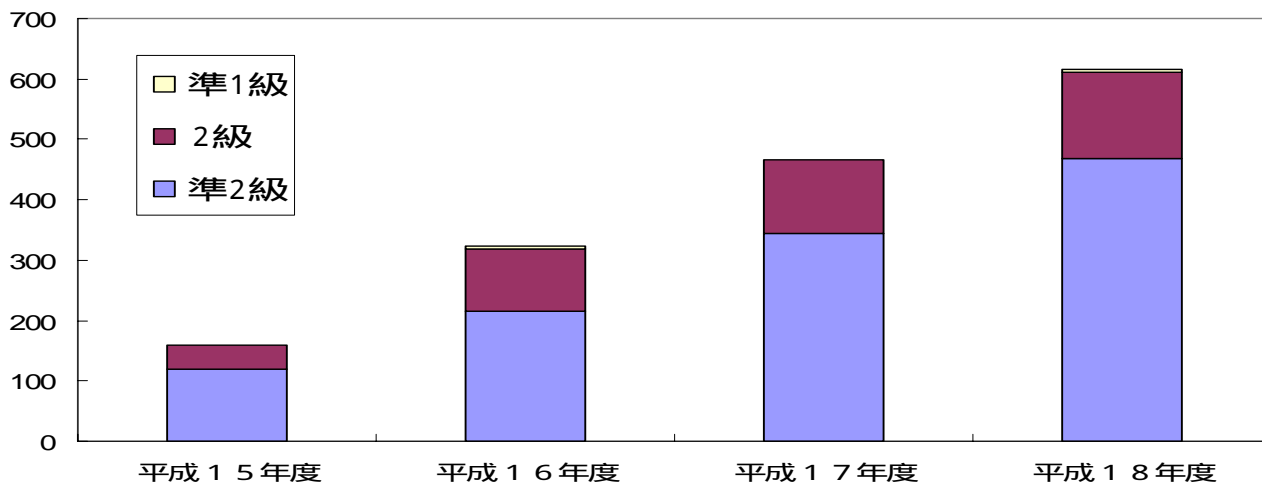


図6-2-1-1 実用英語技能検定の準2級以上の年度別の取得者数(校内)

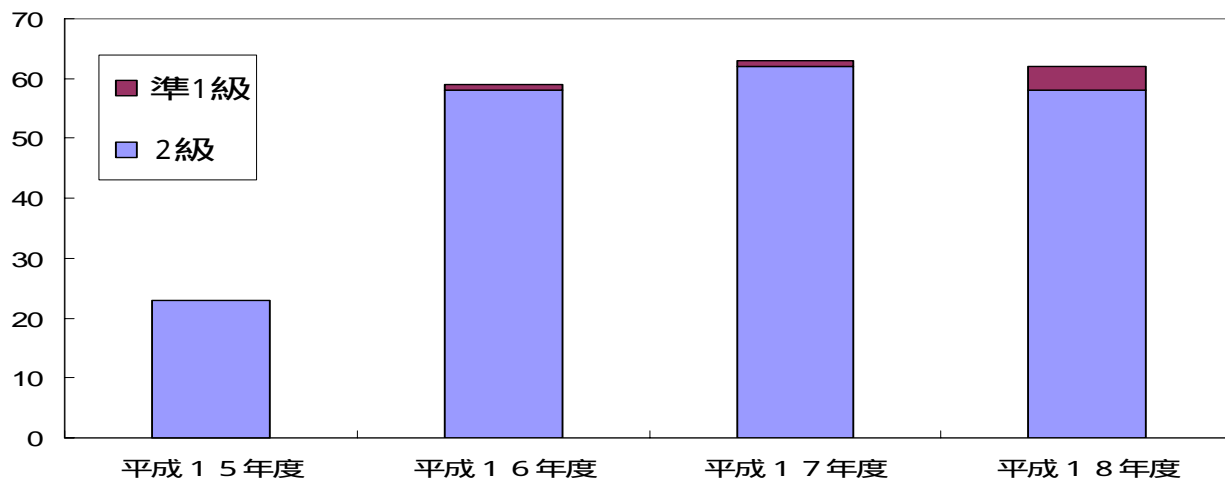


図6-2-1-2 実用英語技能検定の2級以上の年度別の取得者数(国際コミュニケーションコース)

表6-2-1-3 実用英語技能検定の準2級以上の学年別取得数率(国際コミュニケーションコース)

	級	入学年度			
		H15年度 H17卒生	H16年度 現3年生	H17年度 現2年生	H18年度 現1年生
取得数	準1級	1	0	4	0
	2級	29	25	22	11
	準2級	11	10	14	28
取得率	準1級	2%	0%	10%	0%
	2級	71%	71%	55%	28%
	準2級	27%	29%	35%	70%
在籍数		41	35	40	40

〔2〕 GTEC for Students の SELHi 研究における位置づけとこれに基づく評価

研究開発における GTEC の位置づけ

英語のコミュニケーション能力を把握するための標準化された指標の一つとして利用した。実用英語技能検定(英検)が英語の4技能すべてを検査するのに対して、GTECではスピーキングを除く3技能が把握できる。また英検は 級という段階的な技量の表示に留まるが、GTECでは表4・5に示すような連続的なスコアと段階的な技量の表示が併用されている。加えて、実施の時期に制限がなく、いつでも必要に応じて実施できるという利点がある。

今年度は、1・2年生は、9回(5月)、と10回(12月)の2度、3年生は9回(5月)の1度、希望者に対して実施した。テストは2タイプあり、1学年には Basic、2学年、3学年には Advanced を選択した。両者はテスト間での連続性が図られており、習熟度が同じならば、どちらのタイプを受験しても同一スコアが出るよう調整されている。

成果の特徴

TOTAL スコアは、「社会で求められる英語力(グレード5)」を1年生で既に四分之三の生徒が達成している。学年ごとの平均値がこのグレード5に到達する時期は、平成16年度入学生(現3年生)で2年生時の12月、平成17年度入学生(現2年生)で2年生時の5月、平成18年度入学生(現1年生)で1年生時の12月と急速に前傾している。SUPに基づく指導の成果といえる。

表6-2-2-1 TOTALスコアと英語力のレベル (2005ベネッセ・コーポレーション)

グレード6 676以上	アメリカ・カナダの大学に留学可能な英語力
グレード5 550以上	社会で求められる英語力 / センター試験の英語で8割以上を得点できる英語力
グレード4 537以上	アメリカ・カナダの短大クラスに留学可能な英語力
グレード3 440以上	短期の留学で現地の高校の授業についていける英語力
グレード2 380以上	ホームステイ・海外旅行で困らない英語力
グレード1 300以上	ALTの先生と日常的な会話ができる英語力

表6-2-2-2 TOTALスコアでグレード5以上を達成の数と割合(国際コミュニケーションコース)

	受験数	グレードA(676点)		グレードB(550点)	
		達成数	達成率	達成数	達成率
1年生	40	0	0%	30	75%
2年生	35	15	43%	32	91%
3年生	35	10	29%	28	80%

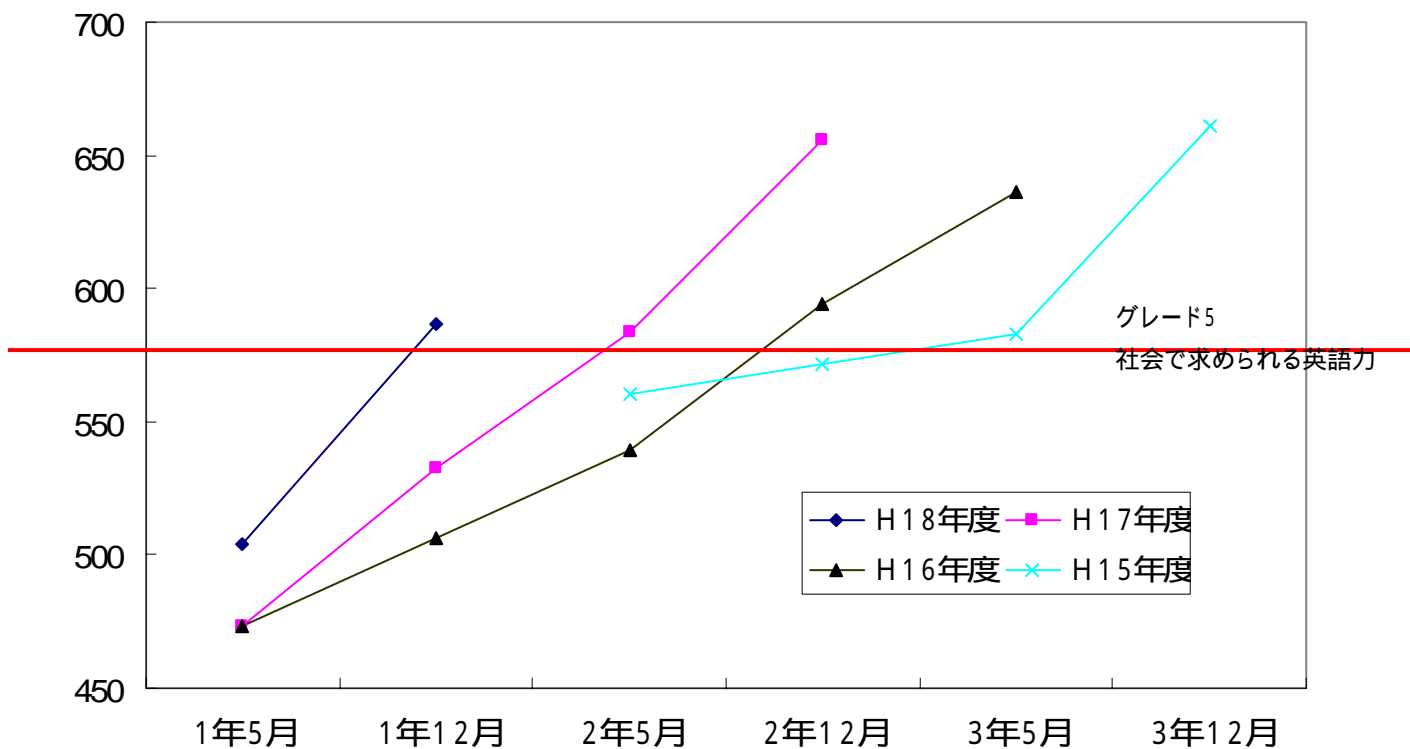


図6 - 2 - 2 - 1 TOTAL スコアの平均値の入学年度ごとの経時変化(GTEC)

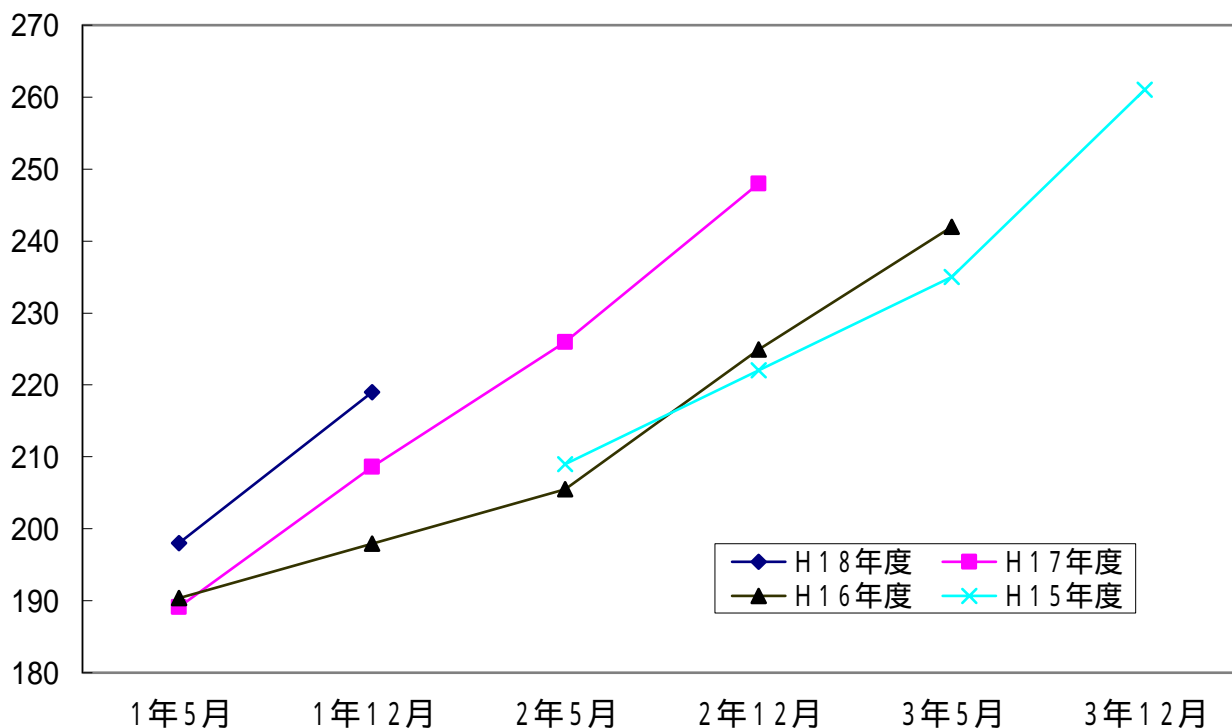


図6 - 2 - 2 - 2 READING スコアの平均値の入学年度ごとの経時変化(GTEC)

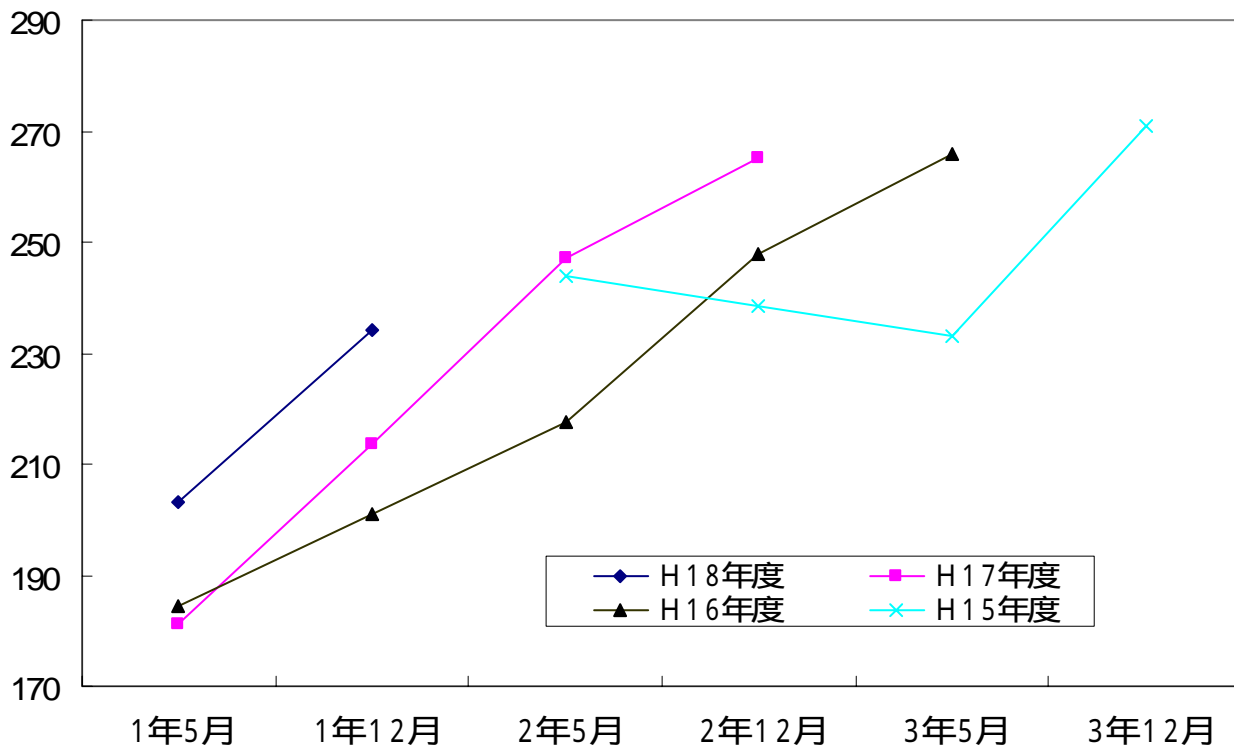


図6 - 2 - 2 - 3 LISTENING スコアの平均値の入学年度ごとの経時変化 (GTEC)

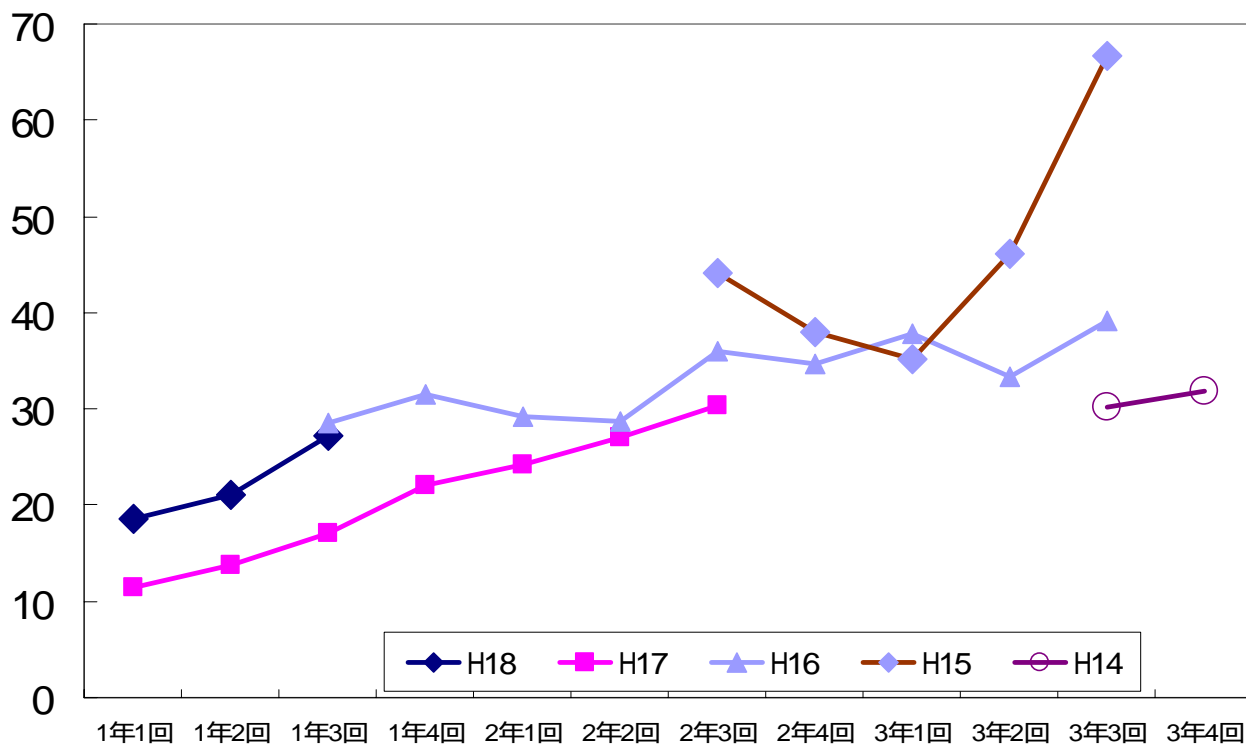


図6 - 2 - 2 - 4 SPEAKING の「総合指数」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WSA テスト)

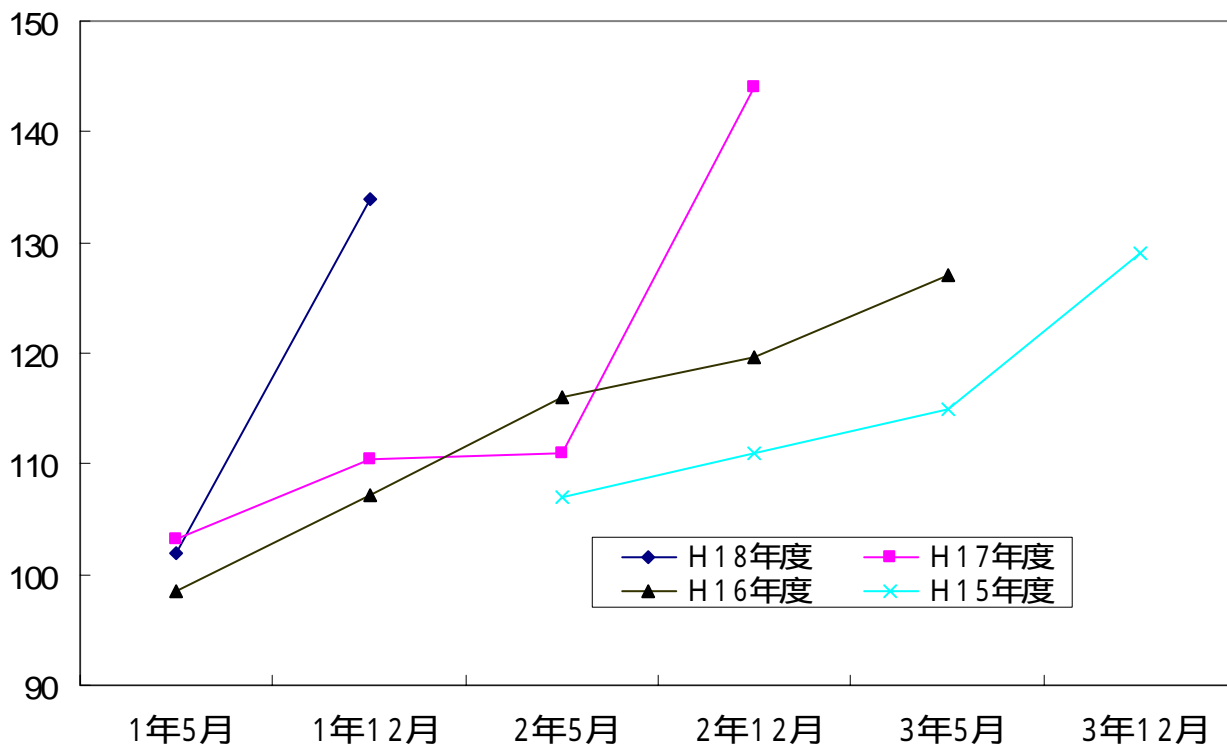


図6 - 2 - 2 - 5 WRITING スコアの平均値の入学年度ごとの経時変化 (GTEC)

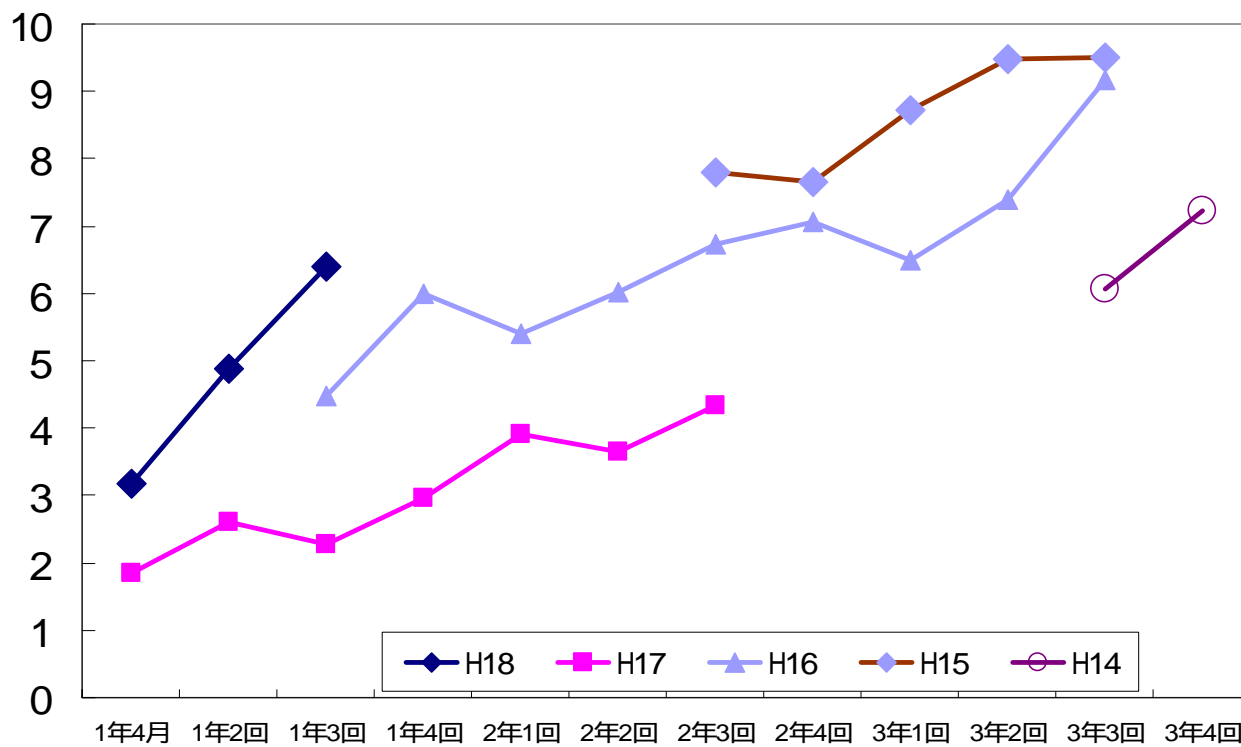


図6 - 1 - 2 - 6 WRITING の「総合指数」の平均値の入学年度ごとの経時変化 (WSA テスト)

表6 - 2 - 2 - 3 Writing のグレード・スコアと習熟度の目安(2005ベネッセ・コーポレーション)

グレード6 160 以上	興味深い事例を取り入れながら、課題に沿った話の展開が完全にできている/文章の構成がしっかりして、文の段落が論理的につながっている/課題にふさわしい具体的な語句が、よく考えて選ばれている。
グレード5 130～160	事例を取り入れながら、課題に沿った話の展開ができている/接続語句を正しく使って、文章はまとまりよく構成されている/使われている語句は正確で多様性に富んでいる。
グレード4 100～130	課題に沿った話の展開が十分できている/接続語句をうまく使いながら、論理的に整理された文章がかけられている / 難しい語句を使おうとする努力が認められる/ごくまれにミスによって考え方が伝わりにくいところがある。
グレード3 80～100	話の展開はやや不十分だが、具体的な事例を含めて、ほぼ課題に沿った内容が書けている/文の多くは論理的に整理され、構文や語彙にもいくらか多様性が見られる・時にはミスによって考えが伝わりにくいことがある
グレード2 40～80	語彙が少なく、文型・構文は単純なものであるが、英語で表現しようとする意思が認められる/最後まで書いていない文や語順が不確かな文があり、考えが伝わりにくいところがある。
グレード1 40 未満	文章が短く、ごく簡単な単語と文型で表現ができる/文の一つひとつが最後まで書いていないところがある/日本語を使って表現している部分がある。

〔3〕 大学入試センター試験

表6 - 2 - 3 - 1 大学入試センター試験「外国語(英語)」の過去三年間の結果の推移

受験 年度	国際コミュニケーションコース				校内					全国			
	平均点 偏差値	筆記 (200)	リスニ ング(50)	総合 (200)	受験 者数	平均点 偏差値	筆記 (200)	リスニ ング(50)	総合 (200)	受験 者数	総合 (200)	標準 偏差	受験 者数
H17	59.5	***	***	152.4	31	53.9	***	***	131.1	313	116.2	38.0	520,048
H18	62.3	174.9	47.4	177.8	38	54.8	146.3	40.3	149.2	353	131.0	38.1	499,630
H19	61.0	175.3	42.6	174.3	31	55.0	151.2	36.9	150.5	343	130.8	39.6	503,823

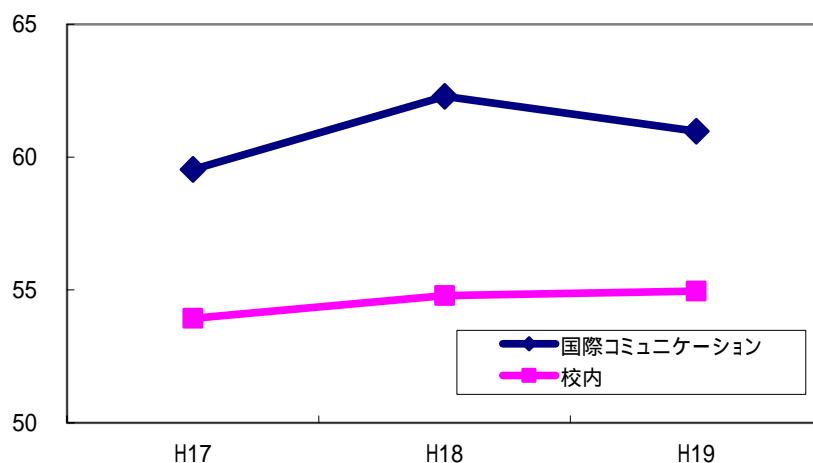


図6 - 2 - 3 - 1 大学入試センター試験「外国語(英語)」の過去三年間の「平均点偏差値」の推移

7 校内の英語教育の改善状況

(1) 英語教員の指導方法の改善

〔1〕 教育課程やシラバスの改善

「平成16年度(第1年次)」の課題 および「平成17年度(第2年次)」の取り組み

平成16年度(第1年次)の研究開発では、生徒の英語による発信能力の把握そのものが研究開発課題の一部であった。そこで SELHi 指定と研究開発の成果に基づいて、次の2つの改善点が導かれた。

ライティングとスピーキングにおける明確な目標値の設定

発信能力を高めるための「トレーニング型活動」のシラバス化

上記の改善により、各学年の指導の目標値に適合する指導内容・方法を考えることができるようになった。すなわち、これまでの質的な記述だけでなく、量的な目標の記述が加わることにより、教師・生徒ともに獲得すべき能力のレベルがイメージしやすくなった。結果として、上記のようなシラバスや定期考査の改善に繋がるとともに、生徒がスピーキングの流暢さなどでの自分の目標値を確認しながら、自主的にスピーキングのトレーニングを行い始めるなど、動機づけの面でも成果が期待できる状況である。

上記の改善により、新しいシラバスでは、これまで担当教師の裁量に過ぎなかったコミュニケーション・トレーニング型の活動を、科目間の体系化を図りながら位置づけることができた。これは、今年度までの授業及び授業シラバスが、時期を限定したイベント型の活動を中心に構成されていたため、知識や経験としての陶冶は可能であるが、本質的なコミュニケーション能力の向上には至っていないという反省に基づくものである。

平成16年度(第1年次)の授業においては、「音読」・「暗誦」・「即興」といったスピーキングの練習活動を探索的に投入した。

平成17年度(第2年次)には、これまでのライティング練習に加えて、スピーキングの練習活動を「年間を通して毎日練習する活動」として系統的に、SUP2(ステップアップ・プログラムの第2案)及び「科目ごとのシラバス」に位置づけて実施した。

平成17年度(第2年次)からは、SUPを本格的に実施したことで、科目ごとの工夫や改善(ステップアップレポート)、普通コースへの随時適用(いわゆる小技)など、スタッフ全員で取りかかる体制がようやく整備されたといえる。

その成果の第一段階として、平成17年10月28日(金)には、「広島市立舟入高等学校SELHi研究開発成果中間報告会」を開催し、全国から80名の参加を得た。ここでは、外国語(英語)科の教諭全員が、国際コミュニケーションコース及び普通科普通を対象に研究授業を行い、ライティングとスピーキング及び「音読」・「暗誦」・「即興」のトレーニングによる「議論できる発信能力」を育成するための授業を展開した。

平成18年度(第3年次)の取り組み

今年度(平成18年度・第3年次)の取り組みでは、研究開発成果の「継続」と「普及」をねらいとして、外国語(英語)科のスタッフ全員で、次のことに取り組んだ。

指導技法の共有と継続のための「大技・小技マニュアル」の作成とビデオ映像の撮影

「従来型」の学習活動のSUP3との関係と位置づけの明確化

上記のマニュアルに関しては、「ねらい」「方法」「留意点」を示し、トレーニング型の学習活動における意義と位置づけができるだけ明確となるように心がけた。「マニュアル」は資料編に掲載する。

一方で、ビデオ映像については、生徒の肖像権やプライバシー保護のため、校内での研修資料に留めたい。

また、上記の「従来型」については、もともと研究対象とはしていなかった受信型の技能である「語彙・文法」「リーディング」「リスニング」について、SUP3との関係と位置づけを検討した。

その結果として、最終的に「発信技能に繋がる受信型の技能の指導」という観点をスタッフ全員で共有し、深めることができた。

さらに、平成18年11月2日(木)には、「広島市立舟入高等学校SELHi研究開発成果最終報告会」を開催し、全国から約70名の参加を得た。ここでは、外国語(英語)科の教諭全員が、国際コミュニケーションコース及び普通科普通を対象に研究授業を行い、ライティングとスピーキング及び「音読」「暗誦」「即興」のトレーニングによる「議論できる発信能力」を育成するための授業を展開した。

とくに今回は、「トレーニング型」の学習活動のポイントを重点的に観察していただくため、同時に行われている授業について指導内容をタイムテーブルの一覧に記すなどの工夫をした。

(2) 研究授業や公開授業の実施状況

平成18年11月2日(木)には、「広島市立舟入高等学校SELHi研究開発成果最終報告会」を開催し、全国から約70名の参加を得た。ここでは、外国語(英語)科の教諭全員が、国際コミュニケーションコース及び普通科普通を対象に研究授業を行い、ライティングとスピーキング及び「音読」「暗誦」「即興」のトレーニングによる「議論できる発信能力」を育成するための授業を展開した。

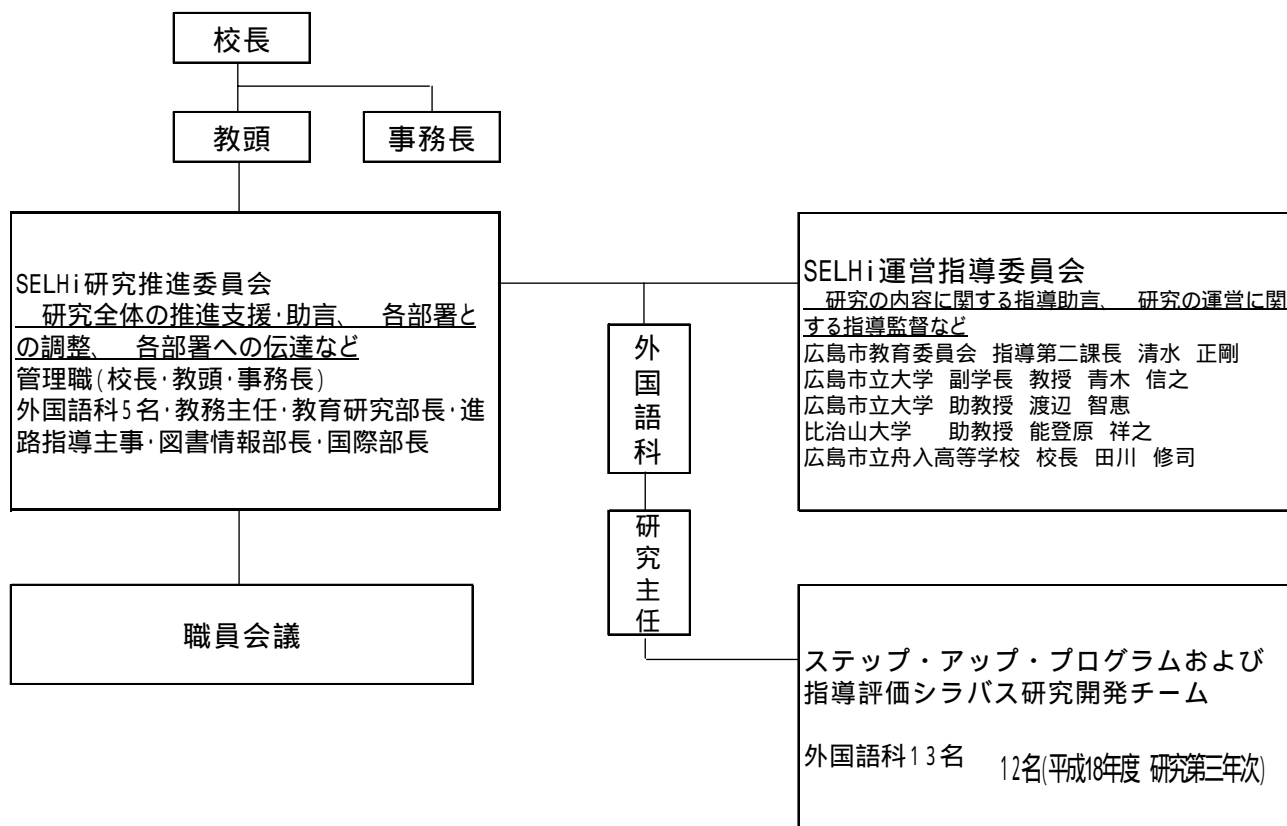
とくに今回は、「トレーニング型」の学習活動のポイントを重点的に観察していただくため、同時に行われている授業について指導内容をタイムテーブルの一覧に記すなどの工夫をした。

(2) 校内組織の変容について

SELHi 指定を契機とする校内組織の変容はおもに、学校全体でSELHiの研究開発を支援するための「SELHi 研究推進委員会」と、実働として教科内での研究開発の進捗を図るための「SELHi 研究推進会議」の設立である。今年度は、「SELHi 研究推進会議」を昨年度の週1回、時間割の中に位置づけて行い、専門科目間の指導内容を体系化するために必要な調整を行った。このように、校内組織の変容を通じて、SELHi 指定に関わる研究開発を実施することにより得られた知見を教育活動の改善のためにフィードバックできる態勢を整えることができた。

8 研究開発組織について

(1) 研究組織図



(2) SELHi 研究推進に関わる会議及び委員会

名称	頻度	場所	委員など
運営指導会議	隔月	広島市立大学	SELHi研究運営指導委員 (3) 外国語(英語)科 (3)
SELHi研究推進委員会	随時	校内	SELHi研究推進委員 (13)
SELHi研究推進会議	週2回	校内	外国語(英語)科 (13)

(3) 運営指導会議活動状況

期日	場所	主な議題	協議・指導事項	協議・指導への対応
第1回 平成 18 年 7 月 14 日	広島市立舟入高等学校 会議室	「第三年次の SELHi 研究開発の推進と連携のあり方について」	第三年次研究開発の進捗状況 最終報告のまとめ方について 個人学習ソフトの運用について 今後の連携方法	・ 第三年次の研究における授業の変容の例などビデオで確認 ・ WSA+SA テストによる即興発話の維持率 (maintenance rate) について
第2回 平成 18 年 9 月 26 日	広島市立舟入高等学校 会議室	「文部科学省 SELHi 実地調査の反省」	「流暢さ」を育成する技法のさらなる発展 Appropriacy への配慮を今後検討すべき エッセンスをわかりやすくまとめる努力	・ トレーニング型の「指導マニュアル」の作成 ・ Appropriacy と Accuracy を高める 新たな指導法の開拓 ・ 研究会などへの参加
第3回 平成 18 年 11 月 2 日	広島市立舟入高等学校 国際コミュニケーションホール	「広島市立舟入高等学校 SELHi 研究開発成果最終報告会の反省」	『SELHi 研究開発成果最終報告会』の議事として 8 - (4) - (2) に別途掲載	同左

(4) SELHi 研究開発成果最終報告会

〔1〕実施要項

日時 平成18年11月 2日(木)

場所 広島市立舟入高等学校

日程

受付	12:00～	
開会行事	12:30～13:10	ステップアップ・プログラムの概要と公開授業との関連について(説明:研究主任 西巖弘)
公開授業	13:20～14:10	スタッフ全員による研究授業
公開授業	14:20～15:10	〃
研究協議	15:20～17:00	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本校のSELHiの概要について (説明: 研究主任 西巖弘) ・ 研究授業についての質疑応答 (司会: 近藤あゆみ) ・ SELHiについての質疑応答

ご講評

広島市立大学 副学長	教授	青木信之先生
広島市立大学	助教授	渡辺智恵先生
比治山大学	助教授	能登原祥之先生

広島市立舟入高等学校 SELHi 研究開発成果最終報告会 平成18年11月2日(木) 公開研究授業の概要

日程	授業番号	科目	学年	コース	教室	授業者	ALT	イベント型	トレーニング型	従来型	授業紹介
5限	51	英語	1年	普通	504	為西正和			音読	語彙・文法 精読・速読	4技能を向上させるための様々なトレーニングを通して内容理解を図る。
	52	英語	2年	普通	LL2	川本由美			音読	語彙・文法 精読・速読	LL機器を用いて、内容把握や音声指導を行なう。
	53	英語	2年	普通	406	横山幸夫			音読	語彙・文法 精読・速読	速読と音読の方法を指導し、読めることで内容理解とリテンションの能力を高めアウトプットと運動させる。
	54	異文化理解	2年	国際	CALL	大鴻淳二			暗誦	リスニング	異文化コミュニケーションを促進させるために、CALL機器で総合演習を行なう。
	55	英語表現	2年	国際	302	佐藤将記	ナタリー・ヤンチャムナム ジョセフ・マリオット	ライティング ディスカッション	即興		与えられたテーマについてグループ・ディスカッションを行ない、スピーキング能力の育成を図る。
6限	56	リーディング	3年	理型	101	栗栖五代			音読	語彙・文法 精読・速読	構成把握と意味把握を中心に、英文読解力を養成する。
	61	OCI	1年	国際	CALL	福崎穰司			即興		スピーキングトレーニングを通して話す技能をより高める。
	62	OCI	1年	国際	509	近藤あゆみ	ジョセフ・マリオット		即興		間違いをおそれず積極的に英語を発話するトレーニングを行なう。
	63	英語	2年	国際	LL2	佐々木百合子			音読	語彙・文法 精読・速読	音読は聴くことから、基本にし、音読のトレーニングを十分に行い、内容を把握させる。
	64	英語	2年	国際	302	住田恒三		ライティング	音読	語彙・文法 精読・速読	音読は聴くことから、基本にし、音読のトレーニングを十分に行い、内容を把握させる。
	65	コミュニケーション	3年	国際	総演0	堂鼻香代子	ナタリー・ヤンチャムナム	ディベート ライティング	即興		英語で即興的に意思疎通する能力を高めるため、大技・小技を駆使して、言話と思考をトレーニングする。
66	コミュニケーション	3年	国際	201	西巖弘		ディベート ライティング	即興		英語で即興的に意思疎通する能力を高めるため、大技・小技を駆使して、言話と思考をトレーニングする。	

広島市立舟入高等学校 SELHi 研究開発成果最終報告会 平成18年11月2日(木) 公開研究授業
 【授業内の活動の配置】

日程	授業番号	科目	学年	コース	教室	授業者	0 min.	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50		
5限	51	英語	1年	普通	504	為西	内容理解										オーバーラッピング		
							Reading about Dictation		スラッシュリレーディング								explanation		音読
							Word Test	ディクテーション	reading										consolidation
	52	英語	2年	普通	LL2	川本	reading										consolidation		
							Review	reading								translation		consolidation	
							コンピュータソフトを使用した発音練習	ビデオ教材 ディクテーション	ビデオ教材 リビテーティング	ビデオ教材 暗誦	ビデオ教材 ヘアワーク・ボイスオーバー	ビデオ教材 各ペア発表							
53	英語	2年	普通	406	横山	reading										consolidation			
						Review	reading								translation		consolidation		
						Speaking Practice モ/ログ	Group Discussion										Presentation by the reporter		
54	異文化理解	2年	国際	CALL	大鴻	reading										consolidation			
						コンピュータソフトを使用した発音練習	ビデオ教材 ディクテーション	ビデオ教材 リビテーティング	ビデオ教材 暗誦	ビデオ教材 ヘアワーク・ボイスオーバー	ビデオ教材 各ペア発表								
						Speaking Practice モ/ログ	Group Discussion										Presentation by the reporter		
55	英語表現	2年	国際	302	佐藤	reading										consolidation			
						Speaking Practice モ/ログ	Group Discussion										Presentation by the reporter		
						単語テスト	速読テスト	単語の音読・本文の構成把握と部分把握										コーラス リレーディング	
56	リーディング	3年	普通	101	栗栖	reading										consolidation			
						単語テスト	速読テスト	単語の音読・本文の構成把握と部分把握										コーラス リレーディング	
						単語テスト	速読テスト	単語の音読・本文の構成把握と部分把握										コーラス リレーディング	
6限	61	O C I	1年	国際	CALL	福岡	reading										consolidation		
							2分モ/ログ	Reading practice	Discussion								Presentation		
							2分モ/ログ	Warm-up game	Impromptu speeches										
							単語テスト	予習テスト&チェック	内容理解								Reading Practice (ペアワーク)		
							単語テスト	音読	内容把握								音読		
							単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング		
	62	O C I	1年	国際	509	近藤	reading										consolidation		
							2分モ/ログ	Warm-up game	Impromptu speeches										
							単語テスト	予習テスト&チェック	内容理解								Reading Practice (ペアワーク)		
							単語テスト	音読	内容把握								音読		
							単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング		
							単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング		
63	英語	2年	国際	LL2	佐々木	reading										consolidation			
						単語テスト	予習テスト&チェック	内容理解								Reading Practice (ペアワーク)			
						単語テスト	音読	内容把握								音読			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
64	英語	2年	国際	302	住田	reading										consolidation			
						単語テスト	予習テスト&チェック	内容理解								Reading Practice (ペアワーク)			
						単語テスト	音読	内容把握								音読			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
						単語テスト	音読	トーキングマッチ								5分ライティング			
65	コミュニケーション	3年	国際	総演0	堂鼻	reading										consolidation			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
66	コミュニケーション	3年	国際	201	西	reading										consolidation			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			
						1分モ/ログ	2分モ/ログ	トーキングマッチ								5分ライティング			

表 8 - 3 - 1 研究授業および研究開発に関する質疑応答

学年	コース	科目名	担当	質疑	応答
1	国際	OC	福崎穰司	CALL 教室を使用する意義がよくわかりませんでした。	CALL 教室はあくまでも場所提供であって、本来のOC の授業はスピーキング中心の授業展開です。指導案を見ていただければわかりだと思っております。
1	国際	OC	福崎穰司	OCのクラスで日本語の使用(生徒側)をどの程度認めておられるのでしょうか。学年別に差をだしておられるのでしょうか。	基本的には日本語禁止です。話をしているも英語を話すようにと英語で注意をします。知らず知らずに日本語を話していた場合は仕方ないですが、原則として禁止をしている姿勢で取り組んでいます。2年、3年になれば、日本語を話す雰囲気ではなく自然に英語で話すようになってしまうものです。
1	普通	英語	為西正和	生徒のノートが左に英文、右に訳がありました。訳は生徒が前もって全て作ってくるのでしょうか。 GTECと英検のどちらを今回の英語教育のベンチマークとして重視されていますか。	1学期には事前に訳してくるよう指導をしていましたが、2学期からは強制していません。 SELHiに応募をする際、評価方法としてどちらを取るか熟慮しましたが、GTECはスピーキングのテストが、また英検はライティングのテストが十分でないことからどちらとも採用し、本校が独自に開発したWSAテストとともに総合的に評価することにしました。
1	普通	英語	為西正和	本文に関する質問を作らせる活動で、3名指名しておられました。その他の生徒の添削はどのような方法で行われているのでしょうか。	基本的には授業後プリントを集めて、添削をしています。

1	普通	英語	為西正和	生徒は電子辞書を使っているようですが使い方の指導をするのですか。また、紙の辞書と比べてどうですか。電子辞書の方が良いですか。	電子辞書と紙の辞書の販売を生徒に紹介した際、ほとんどの生徒が電子辞書を購入しました。予想外だったので電子辞書の指導は十分できていませんが、授業中に辞書を引く際ジャンプ機能の使い方や用例、成句の指導等を適宜行っています。電子辞書の利点の1つはジャンプ機能だと思います。英和から関連のある和英に瞬時に移動できるのはとても便利だと思います。
2	国際	英語	住田恒三	新聞記事の投げ入れのタイミングは？	教科書の Lesson が終了するたびに使っている。教科書にはないタイムリーな話題が面白い。
2	国際	英語表現	佐藤将記	毎時間2名のAETがいるのか。	はい。
2	国際	異文化理解	大鴻淳二	映画教材はどのようなものを選定しているのか？	映画教材については異文化やその国の慣習、歴史的背景、民族問題がわかるものを選んでいく。また、是非押さえておきたい会話表現が使われている題材があれば、上記以外の物を教材として使うことがある。
3	国際	コミュニケーション	西 巖弘	I was very impressed with the fact that the teacher used all English, naturally, effectively and confidently, this providing a great role model for the students. Creating an atmosphere in which students feel they can use, challenge and experiment with English is of course essential for developing language fluency. This atmosphere was very present in the class. The students seemed not only confident but very willing and just as importantly truly interested in taking the challenge of speaking up and speaking out.	Through these 3 years of study, we have explored the way in which the biggest number of students can have the opportunity to say something and express the feelings and thoughts of themselves. The method we have is yet on the way to be suitable to our purpose, but the result shows our trial is significant not only for improvement of teaching technique but for the betterment of students' school life in general.

3	国際	コミュニケーション	西 巖弘	<p>大変刺激的な授業でした。生徒さんが全員50分間フルに頭を働かせているというのが素晴らしいと思いました。</p> <p>最後に生徒さんが書いていたwriting 課題は毎回提出ですか。内容(論理性も含めて)のチェック、英語(文法等)のチェック、コメントの書き込みなどをした上で返却されるのですか。</p> <p>この授業のみならず、生徒さんが自宅へ持ち帰る課題はどの程度の量になりますか。それに対するアフターケアはどのようにされていますか。</p>	<p>計画では毎回提出としている。しかし、授業進度と生徒の様子を見て、省略することもある。内容チェックとコメントは主にALTが行っている。運営指導委員の青木信之先生より、生徒に対して「これらのフィードバックには必ずしっかり目を通すように」との注意していただいている。</p> <p>科目、学年、時期により異なるので、明解は不可だが、家庭学習のために自由に使える時間も限られているので、「調べ物」などはできるだけ授業内に準備時間を設定するように心がけている。</p>
3	国際	コミュニケーション	西 巖弘	<p>1クラスを2分割していたが、どのように分けたのか。生徒に尋ねたら、先生が適当に分けたとのこと。</p>	<p>そのとおりである。担任の佐藤先生が無作為に分けた。</p>
3	国際	コミュニケーション	西 巖弘	<p>科目通りの授業展開が行われていると思いました。非常にProductiveな授業だと思います。生徒の自主性も感じられ、トークン・マッチはとても参考になりました。ありがとうございました。</p> <p>クラス編成はどのようにされているのですか。男女比は？</p>	<p>国際コミュニケーションコースの3年生は1クラス、全体で35名、女子30名、男子5名。担任の佐藤先生が無作為に分けた。</p>
3	国際	コミュニケーション	西 巖弘	<p>西先生の英語力がとても素晴らしかったのですが、海外経験もしくは、日頃英語力を維持するためにされていることを教えてください。</p>	<p>本当に全く大したものではありませんのでお恥ずかしい限りです。海外経験はフランスとNZにそれぞれ10日程度。日々レベルアップには努めていますが、教科書や受験用の教材など、ていねいに音声を取れば自分自身にとってもかなりの勉強になると思っています。</p>

3	国際	コミュニケーション	堂鼻香代子	<p>トーキング・マッチが大変印象深かったです。Discussion と debate の要素が組み込まれており”何もしない”生徒を作らないように構成されていたところも含め、すばらしかったです。ありがとうございました。</p> <p>質問 モノログの話題については事前に準備させ暗記させているのですか。それともその場で生徒が作っているのですか。またあそこまで fluency があって意見を述べられるように1,2年次でどういった取り組みに力を入れていますか。習熟度別で行われているのですか。</p>	<p>トピックについては毎時間の予定を学期ごとに生徒に渡しているもので、予め考えてくる生徒もいるがほとんどが即興で行っている。同じトピックを何回か繰り返し提示しているので繰り返すうちに上達しているようだ。習熟度別ではない。</p>
3	国際	コミュニケーション	堂鼻香代子	<p>生徒たちが生き生きと積極的に”Talking Match”に参加している姿に感動しました。SELHi の取り組みは成功していると思います。ただ、debate の際生徒たちが「正しくない英語」(文法、語彙など)を使っていた場合教員はどこまでチェックしてどこまで直せるのかは疑問です。</p>	<p>基本的にはFluencyを主目標にしているので文法についてはこだわらない。ただし臨機応変にフィードバックすることはある。正確さやエラーについてはWSAテストで定期的に客観的なフィードバックを行っている。</p>
3	国際	コミュニケーション	堂鼻香代子	<p>トーキング・マッチの次のステップはどのような展望内容を考えておられますか。また他教科との連携はありますか。</p>	<p>Discussionを予定している。</p>

〔 3 〕 運営指導委員からの講評

広島市立大学 副学長 教授 青木信之先生

「申請時から運営委員として参加させていただいている。英語で議論できるという高い目標をもって取り組んできた。考えて、正確に、そして、話すという3つのことを融合させている。それを実現させるためにトレーニングやイベントといった活動を取り入れ、それを指標させるためにテストで検証、そして、発表をするという大変、短い期間でしているのがセルハイで、この結果が今日の授業だったと思う。舟入の先生方には色々な思いがあるのではと思う。私自身、授業を見ながら開発していくことの大切さ、とりわけ、『実施して、検証する』というサイクルでいくこと、また、このサイクルが舟入高校に根付いており、様々な形で発展していった成果であったと思う。今後は、吸収していくことだけでなく、サイクルをどのように伝えていくのかというのが舟入の先生方の課題であり、使命ではないだろうか。3年間でよくがんばられたと思う。」

広島市立大学 助教授 渡辺智恵先生

「3年前の正月に舟入の先生から私に話しがあったが、昔のように感じられる。今日の5,6限の授業を見て本当に、それぞれの個性があったし、授業は長年の苦労があるのだなあとあらためて感じた。普通コースの授業を見させてもらった。国際の生徒の授業を見ていると何かに必ず、関わるようなことが fluency をあげる根拠だと思う。生徒がしたことを目に見えるような形で実感させる、また、できなかったことを実感させている。他の人はどうなのかということも実感させている。先生方がオール・イングリッシュで授業されているところに敬意を表したい。これからは accuracy と fluency をどのように評価していくかが課題である。国際コースが普通コースの学生にも何か目に見える形で何かないかなと私なりに考えた。」

比治山大学 助教授 能登原祥之先生

「3年間学ばせていただいたのは、セルハイのために version up されたことだ。2年目は、国際は先生方のスクラムを組んで教育されていた。3年目、生徒は時間制限の中で次の活動の切り換えの早さが良かった。ことばのトレーニングをしていくのは時間制限という枠だからこそその良さだと言える。日々のトーキング・マッチのトピックを常に考えている努力を感謝している。」

9 外部講師の講演、授業外活動の記録

(1) 国際コミュニケーションコース修学旅行

時期 平成18年10月9日(月)～10月17日(火) 8泊9日
 場所 フランス ストラスブール
 対象 広島市立舟入高校学校普通科国際コミュニケーションコース2年生40名

昨年度ユーロ会議にアジア諸国の代表として参加し、その後、フランスコルマルのバルトルディー高等学校と相互訪問をするなど友好関係を保っている。

(2) 国際交流宿泊研修

時期 平成18年7月21日(金)～7月23日(日) 2泊3日
 場所 国立江田島青年の家
 対象 広島市立舟入高校学校普通科国際コミュニケーションコース1年生41名

(3) 広島市立高校生英語セミナー

日程 平成18年8月18日(金)～8月19日(土)
 場所 広島市立舟入高等学校
 対象 広島市立高等学校に在籍する高校生

(4) 舟入高校主催英語スピーチコンテスト

日時 平成18年11月11日(土) 9時30分～12時30分
 会場 広島市立舟入高等学校 国際コミュニケーションホール
 対象 舟入高等学校生徒および広島市内の中学生

(5) 「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム2007模擬受業

日時 平成19年3月3日(土) 12時50分～13時40分
 会場 東京ビッグサイト
 対象 広島市立舟入高校学校普通科国際コミュニケーションコース1年生40名

10 今後の計画

(1) 研究開発成果の継続

本校の SELHi 研究開発 3 年間におけるおもな成果物と継続の方途は表 10 - 1 - 1 に示す通りである。
SELHi 研究開発期間の終了後も、 を毎年改訂して改善を図るとともに、表中の を中心とする具体的な取り組みは今後も継続する。

表 10 - 1 - 1 SELHi 研究開発 3 年間におけるおもな成果物と継続の方途

	研究開発したもの(成果物)	継続の方途
	SUP3 ステップアップ・プログラム第3案	SUP4に改訂
	SUP 準拠シラバス	SUP4に準拠
	WSA+SA テスト	WSA シンプルに改訂
	トレーニング型活動マニュアル	活用かつ増補
	ワード・カウンター cNISHI (2004)	活用法を発展・普及

(2) 研究開発成果の普及

本校の SELHi 研究開発 3 年間における成果、とくにトレーニング型の学習活動の普通コース(研究対象外)への普及の実態は表 10 - 1 - 2 に示す通りである。

普及の経路は、まず校内の「国際コースから普通コースへ」、そして「広島市立の小中学校や大学へ」、さらに「日本全国の学校へ」という構想である。

少なくとも、上記 は表 10 - 1 - 2 のように普及の実践をすでに開始している。

また上記 については、本年度より広島市立大学において、英語の教育法の一部に本校のステップアップ・プログラムのトレーニング方式を導入することが予定されている。

さらに、上記 の「全国へ」についても、「『英語が使える日本人』の育成のためのフォーラム 2007(東京ビッグサイト)」で、本校が模擬授業を行い、報道や実践報告を通じて授業内容と本校の研究開発の内容が多方面に伝わったことにより、本校のステップアップ・プログラムのトレーニング方式の普及が見込まれる。

今後は、広島市教育委員会を始め、広島市の他の小・中・高校・大学、ならびに近隣、遠方を問わず、日本各地の学校などと連携を図り、その学校の教育事情に適した普及の方途を開拓しながら、わが国の英語教育の発展に寄与したい。

表10 - 1 - 2 トレーニング型の学習活動の研究対象外への普及の実態

トレーニング	科目	国際コース (研究対象)	普通コース
		指導法・評価法と成果・反省	普及の状況
音読	英語	<p>【指導法】 ディクテーション 英問英答による内容の大意把握 音読、シャドーイング等による音声の徹底反復 音読は、教師のモデルにリピート オーバーラッピング 1文間バズリーディング ペアでの read and look up シャドーイング と流れる 板書した内容語キーワードを参考に、本文の reproduction(全員一斉に)</p>	<p>【1年・英語】 ディクテーション 英問英答による内容の大意把握 (普通コースでは教科書の該当箇所に下線を引いて、ペアで確認してから英答することで、誤答に対する心理的フィルターを下げる) 音読、シャドーイング等による音声の徹底反復は国際コースと同じ なるべく、英語のアウトプットを行わせたいが、英語を話すことに対する心理的負担は国際の生徒よりかなり大きい。1分間モノログで、聞き手が一人であることは、心理的を負荷を下げるようなので続けたい。 口頭による英問英答は難しい。音読による音声指導重視は、英語を恥ずかしがらずに大きな声で発話できるという点で成果を上げている。 今はCALLを使うクラスが決まっているが、音読を徹底して行う内容理解後の時間に、どのクラスもCALL教室を使ってシャドーイングなどにトライさせられたら理想的であると感じている。 (近藤あゆみ)</p>
	英語	<p>ディクテーション(耳から入れて口から出すのがスムーズ) 新しい内容を最初と最後にテキストを見ないでリピート ティング クローズドテストで半暗誦 シャドーイング</p>	<p>ディクテーション リピーティングは国際コースと同じ (佐々木・住田)</p>
暗誦	総合英語	<p>【指導法】 音読 暗誦 音読は、教師のモデルにリピート 繰り返し(5回) 教師の日本語から 英語(生徒) 3回繰り返す 二人ペアを組んで、日本語から英語に、お互いにチェックする(その際、アイコンタクトに注意しながらチェックをする) 【成果・反省】 生徒を立たせてお互いにチェックをしている場合、アイコンタクトだけでなく表情が豊かになりボディランゲージを使用するなど工夫が見られた。</p>	<p>【1年・OC】 音読 暗誦 音読は、教師のモデルにリピート 繰り返し(5回) 教師の日本語から 英語(生徒) 3回繰り返す 二人ペアを組んで、日本語から英語に、お互いチェックする。 【成果・反省】 日頃から声を出すことに慣れていない生徒が積極的に声を出すようになり、英語らしい発音やリズムも習得できるようになった。また、今までは授業中にもかかわらず、寝ていたりしていた生徒が多かったが、立たせて音読チェックをし始めて、寝るような暇がなくなった。 (福崎穰司)</p>

	<p>オーラル</p>	<p>【指導法】 2分間モノログ 教師から与えられたテーマについて述べる(ペアワークで) 日常的なテーマに基づいてグループでディスカッション レポーターがまとめる。 【成果・反省】 生徒を立たせてお互いにチェックをしている場合、アイコンタクトだけでなく表情が豊かになりボディランゲージを使用するなど工夫が見られた。 発表している場合、聞くという態度を養わせる。</p>	<p>【1年・英語】 1分間に何語読めるか。130語以上の生徒が多くなった。(クラスの1/2) 教科書の文を1分間で180語以上の生徒がいる。毎回のレッスンとセクションで訓練している成果であると言える。生徒の状況をみて3年間の指導内容を考え直す必要があると感じる。しかし、長文を読むという意識が高くなったこと、理解しようとする姿勢が良い方向に向くようになったことは、眠る生徒が少なくなったと言うことである。 (福崎稯司)</p>
<p>即興</p>	<p>コミュニケーション</p>	<p>【指導法】 1分間モノログ 自分の経験や希望について述べる(ペアワークでワードカウンターを用いてWPMを記録させる) 2分間モノログ 身近だが賛否両論のある話題について述べる(と同様) Useful Expression for Argumentation テキストの表現を用いて簡易ディベートを行う(与えられた表現が使用できたかどうか) 【成果・反省】 ・発話語数を自己評価できるので、目標値と比較しながら確実にスピーキング力(流暢さ)が伸長する ・正確さや内容の適切さを高めるには、教師は机間巡視により、生徒の発話内容を確認、逐次フィードバックを行うことが絶対必要</p>	<p>【3年・リーディング】 1分間モノログを週1~2回行っている。(トピックと評価法は左記に同じ)。4月~6月で、50WPM以上の生徒が、クラスの4分の1(4月)から半分以上(6月)に増えた。 受験生に対して即興活動を毎回行うことは難しいように思えるが、定期的に行うことを楽しみにしているようにも思える。また、語彙・表現に対する感受性も変化しているように思える。結果として、授業の雰囲気活性化してくるので、居眠りはなくなる。 【1年・英語】 1分間モノログを週1~2回行っている。(トピックと評価法は左記に同じ)。6月時点で、50WPM以上の生徒が、クラスの4分の一程度いる。グループごとにテープレコーダーを渡して録音させたりしている。 教科書の即興表現活動など、予想以上にすらすらと行えるので、この点をさらにのばせるよう、生徒の状況をみて3年間の指導内容を考え直す必要があると感じる。 (西 巖弘)</p>
	<p>コミュニケーション</p>	<p>【指導法】 1分間モノログ 自分の経験や希望について述べる(ペアワークでワードカウンターを用いてWPMを記録させる) 2分間モノログ 身近だが賛否両論のある話題について述べる(と同様) Useful Expression for Argumentation テキストの表現を用いて簡易ディベートを行う(与えられた表現が使用できたかどうか) 【成果・反省】 ・発話語数を自己評価できるので、目標値と比較しながら確実にスピーキング力(流暢さ)が伸長する ・正確さや内容の適切さを高めるには、教師は机間巡視により、生徒の発話内容を確認、逐次フィードバックを行うことが絶対必要</p>	<p>【1年・英語】 1学期は30秒間モノログを実施。2学期以降は1分間モノログを週1~2回行っている。70WPM以上の生徒が数人、50WPM以上の生徒がクラスの4分の一程度おり、とても楽しく活動をしている。 (堂鼻 香代子)</p>